

笠利町文化財報告第20号

# 用見崎遺跡

—長島植物園開発に伴う遺跡確認調査—

1995年

鹿児島県笠利町教育委員会





インテルサット宇宙





上 空

報告書抄録

ふりがな	ヨウミサキイセキ							
書名	用見崎遺跡確認調査報告書							
副書名	長島植物園開発に伴う遺跡確認調査報告書							
卷次								
シリーズ名	笠利町文化財報告							
シリーズ番号	第20集							
編著者名	中山清美							
編集機関	笠利町教育委員会							
所在地	大島郡笠利町中金久141				TEL 0997-63-1218			
発行年月日	西暦 1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
市町村	遺跡番号							
ヨウミサキ 用見崎	大島郡笠利町 用字見崎	笠利町	—			1994.12	約300m <sup>2</sup>	植物園造 園に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
用見崎	砂丘 遺跡	3世紀～ 5世紀	住居跡 2棟	兼久式土器 石器 石製品 広田上層タイプ 貝符		砂丘上の小規模遺跡 でセッット関係がわかる。  兼久式土器と広田上層タイプの貝符が出土したことは初めての確認である。		

## 序 文

この報告書は、長島植物園の大規模開発に伴う植物園敷地内の文化財の確認をするために本町教育委員会が行った事業であります。

この調査は平成4年12月11日から平成4年12月22日にかけて実施し、小規模遺跡の全貌が奄美で初めて発掘調査によって明らかにされました。

この調査が行われ、報告書が発刊されるまでに長島植物園、鹿児島県文化課、長島美術館、鹿児島県埋蔵文化財センターのご指導・ご援助により無事終了することが出来ました。また貝類については千葉県立博物館の黒住耐二先生にお世話になりました。

発刊にあたり、ご尽力下さった作業員、土地所有者、その他関係者の方々に深く感謝の意を表しますとともに、町民の皆様に埋蔵文化財を理解していただき、埋蔵文化財の保護と活用に一層のご協力をお願いする次第であります。尚この遺跡が、発掘の成果を踏まえて保存活用されれば幸いです。本報告書が保存活用の一助になれば幸いです。

平成5年3月

笠利町教育委員会  
教育長 染 光 義

## 例　　言

1. 本書は平成4年度に実施した長島植物園開発に伴う「用見崎遺跡」の確認調査報告書である。
2. 発掘調査は長島植物園の委託を受け、笠利町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査の実測は中山清美と高梨修がこれを行った。
4. 発掘調査の現場写真は中山清美が撮影した。
5. 本書に用いたレベル数値は、すべて海拔絶対高である。
6. 遺物の水洗・注記・拓本などの整理作業は笠利町歴史民俗資料館で行った。
7. 遺物の実測、トレース、写真撮影は中山、田畠、高梨が行った。
8. 本書に記載した遺物番号は、すべて続き番号とし、本文及び挿図、図版の番号は一致する。
9. 本書の編集、執筆は中山清美が行った。
10. 出土遺物は笠利町歴史民俗資料館において、管理・保管を行っている。今後話し合いによってどこに保管展示するかを決める。一応当分の間は笠利町歴民館において管理・保管を行う。

# 目 次

## 本文目次

序文	
例言	
第1章 調査の経過	
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	2
第2章 遺跡の概要	
第1節 遺跡の位置と環境	4
第2節 遺跡の概要	11
第3節 層序	14
第4節 砂丘	15
第3章 用見崎遺跡の調査	
第1節 遺構	17
1. 1号住居跡、2号住居跡	17
2. 構状遺構	17
第2節 出土遺物	18
第4章 自然遺物	
第1節 貝殻各部の名称と用語	28
第2節 リーフ内に棲息する貝類	30
第3節 貝類遺存体	34
第5章 発掘調査の成果	
第1節 発掘調査の成果と今後の問題	44
第2節 見崎遺跡の <sup>14</sup> C年代測定	46

## 挿図目次

第1図 島嶼	3
第2図 黒潮海流図	5
第3図 南島文化圏区分図	5
第4図 笠利町遺跡分布図	6
第5図 周辺遺跡分布図	10
第6図 発掘調査区域位置図	12
第7図-1 発掘調査グリッド設定図 1	12

第7図-2 発掘調査グリット設定図 2	13
第8図 基本層序図	14
第9図 遺跡地形断面図	15
第10図 遺構、出土遺物分布図（……内は貝だまり）	18
第11図 1類土器	20
第12図 2類土器（6はその他の土器）	22
第13図 3類土器	23
第14図 4類土器（1～5 4類土器 6～9 壺形土器）	24
第15図 土器底部（1～11 葉痕を有する 12～15 葉痕を有しない）	25
第16図 貝・石器	26
第17図 概略図	45
図A 用見崎遺跡より出土した食料残滓貝類の組成	
A：種組成、B：生息場所類系組成	39
図B リュウキュウヒバリガイの殻長組成	39
図C コウダカカラマツガイの殻長組成	39

## 挿表目次

第1表 笠利町遺跡地名表	7
第2表 貝類一覧表	30
第3表 貝類の呼称・捕獲法・調理方法表	31
第4表 用見崎遺跡出土の貝類遺存体	34
第5表 用見崎遺跡出土貝類の破損率および沖縄・具志堅貝塚との比較	41
第6表 <sup>14</sup> C年代測定結果	46

# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査に至るまでの経過

ここ数年開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査が増加している。奄美においては行政サイドの道路、畠総事業等が主である。企業が行う開発に伴う発掘調査の例は少ない。笠利町においてはマツノト遺跡について二例目である。本遺跡は企業の開発に伴う確認調査である。

用見崎遺跡はこれまでの調査で小規模遺跡として数ヶ所が砂丘上で確認されている。周知の遺跡として登録されている用見崎遺跡は今回の長島植物園の植物園としての開発計画が町に提出された。町教委は周知の遺跡が立地していることを知らせると共に開発計画があれば調査の必要があることを指導する。県文化課、企業、町企画課、町教委と再三の話し合いの結果平成5年2月に遺跡の確認調査を行うことになった。

開発を行う前に埋蔵文化財の確認調査を行い、その調査結果に基づいて遺跡の今後の処置を決めることにした。奄美ではこうした調査例は前述したとおりあまり例がない。しかし、今後はこうした正しい理解とこれから増加するであろうあらゆる開発にも全部、すべてに文化財保護の調査が徹底されることだろう。

遺跡は砂丘遺跡のため、どの程度の保存状況か、またどれくらいの広がりがあるかは全く不明であった。ただ表土に土器片や石器、貝が散乱していることから地下にも入っている可能性が充分あった。また一部には現在の構の断面に貝層が露出しており、遺物包含層も確認されている。

用の砂丘は長浜とも言われており、笠利町でも現存する砂丘としては一番大きな砂丘である。長浜一帯は以前集落もあったと言われており、田んぼ、畠も多い。またシマのシャーマンであるユタ神達が「金のナベ」や「金、銀」の宝物が埋蔵されているというおつげがあったとされる。そのためかいくつかの場所でいわゆる無断発掘の跡がある。当遺跡もその盗掘に直面しており、遺跡の真ん中に大きな穴があけられてしまっている。見事に遺跡の真ん中を当てたものと関心する。ただし掘り出されたのは金、銀の財宝ではなく、貝ガラや土器、石器であったためあきらめた様である。我々にしてみれば土器や石器、貝が金銀の財宝と同じであり、むしろこの遺跡の調査結果が今後の奄美の先史文化解明の大きなカギをにぎっているといえよう。

調査は長島植物園の全面的な協力を得て、開発に伴う時前の遺跡確認調査を実施することになった。発掘調査期間中に、鹿児島市の本社からも発掘状況の視察に来て頂いた。また、企業関連美術館である長島美術館からも学芸員が発掘調査に参加されるなど、企業側の理解と御協力が頂けたことは、今後の遺跡の処置についても充分生かされるものと思われる。

## 第2節 調査の組織

### 発掘調査

調査主体者	笠利町教育委員会	教 育 長	染 光 義
調査責任者	〃	社会教育課長	南 隆 光
	〃	課 長 補 佐	別 府 良 美
	〃	〃	勢 利 久
調査担当者	笠利町歴史民俗資料館	日本考古学協会員	中 山 清 美
調査員	高 梨 修		
調査補助員	田 畑 一 哉		

### 調査指導助言者

熊本大学文学部教授	白木原 和 美
青山学院大学文学部教授	田 村 晃 一
沖縄県北谷町教育委員会	中 村 愿
鹿児島県考古学会長	河 口 貞 徳

### 報告書作成

調査主体者	笠利町教育委員会	教 育 長	染 光 義
調査責任者	〃	社会教育課長	南 隆 光
	〃	課 長 補 佐	別 府 良 美
	〃	〃	勢 利 久
調査担当者	笠利町歴史民俗資料館	日本考古学協会員	中 山 清 美
調査員	高 梨 修		
調査補助員	田 畑 一 哉		

### 調査指導助言者

琉球大学助教授	池 田 栄 史
北谷町教育委員会	中 村 愿
千葉県立博物館	黒 住 耐 二
青山学院大学	田 村 晃 一

その他長島植物園、笠利町役場、鹿児島県埋蔵文化財センター、鹿児島県文化課、千葉県立博物館等の御協力を得た。

〈発掘作業〉

川畑テツ 坂下ヨチコ 竹今恵 中村貴美代  
泉扶代子 中山美智代

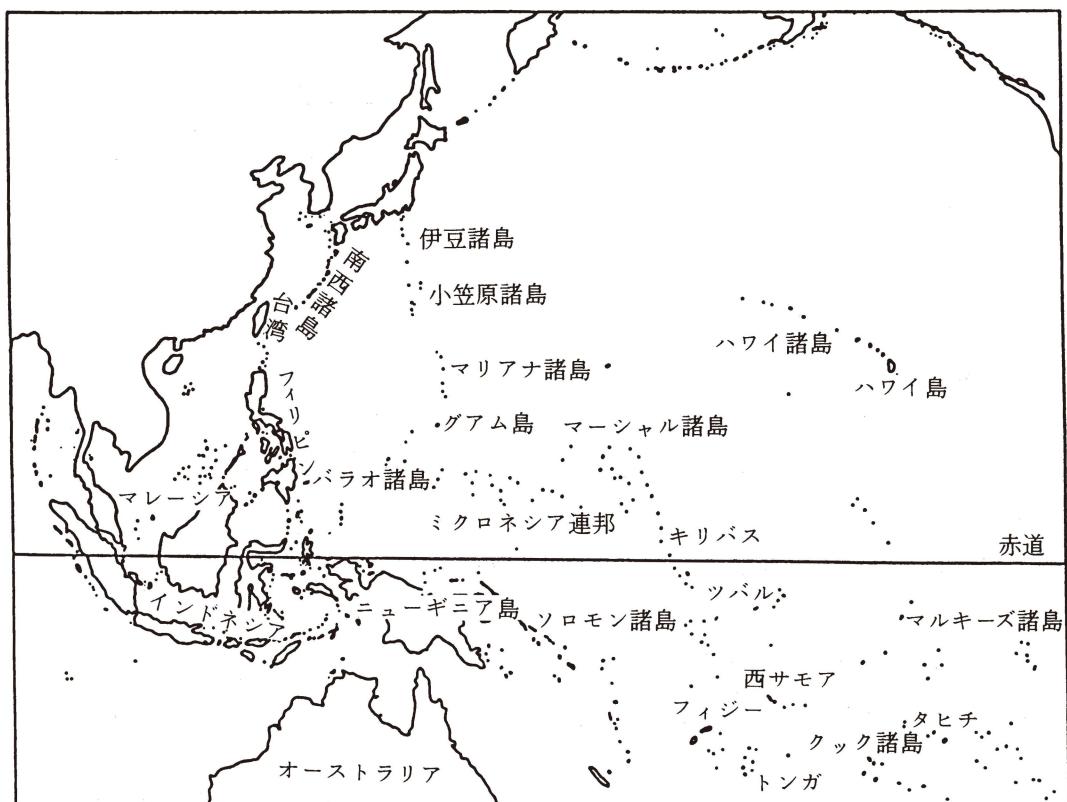
〈整理作業〉

川畑テツ 坂下ヨチコ 竹今恵 中村貴美代  
前田ヒサ子

なお、報告書作成にあたり、上記以外の多くの方々から指導・助言を頂いた。ここに感謝の意を表します。

また、発掘調査期間中に小、中学校生の見学や長島美術館の実習と学習を兼ねた協力も頂いた。奄美とはいえ冬の海岸近くでの発掘は風の日は寒くきびしいものがあったが、長島植物園の事務所を休息やお茶の時間に使用させて頂いた。あらためて感謝する次第である。

見学者のマナーも良かったし、観光地での調査のため、踏み荒されないかを大変心配したが、無駄なとりこし苦労であった。うれしいことである。



第1図 島嶼

## 第2章 遺跡の概要

### 第1節 遺跡の位置と環境

鹿児島から台湾にかけて弧状に連なる島々。有人、無人の島々はおそらく数百島になろう、これらの島々が黒潮海流のどまん中に見えかくれしている。台湾の南方に発流し北上する黒潮は地球の大動脈のごとく幅約200キロ、水深約1,000メートル、水温約15度以上、時速約8キロという大潮流が弧に連なる島々を抱き、日本列島まで暖かくつつみ込んでいる。この黒潮は昔から富をもたらし新しい文化を乗せて北上し、その流れの反流で北からの文物も乗せてくれた。我南島はまさに北の文化、南の文化、大陸の文化をこの黒潮の影響で与えられて来た。まさに「黒潮文化」であろう（第2図）。

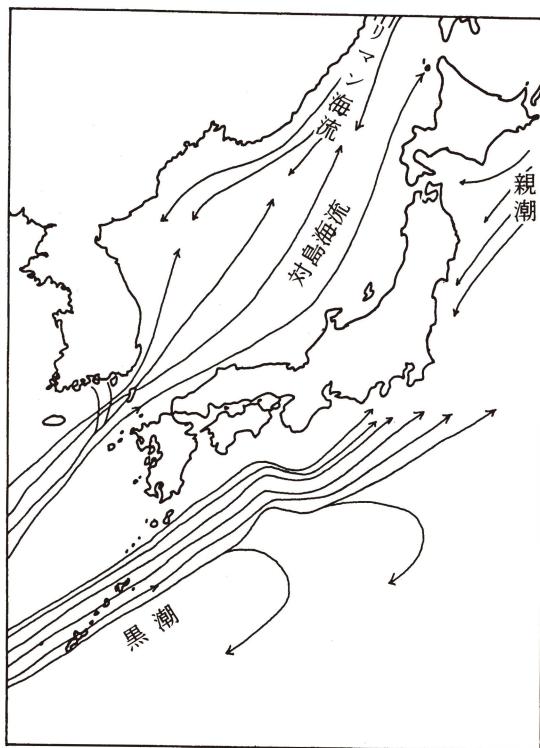
南島を国分直一は三つの文化圏に区分した。トカラ以北を北部文化圏、奄美・沖縄を中部文化圏、八重山以南を南部文化圏として、その文化の相違によって区分している（第3図）。

中部文化圏にあたる奄美・沖縄は先史時代から類似する土器文化を持ちながらその共通性と相違点については今だ具体的に明らかになされてない部分が多い。近年になってようやく考古学的立場からの調査が行われはじめた奄美は、まさに九州本土と沖縄の谷間となっていた学問の一部を埋めようとする作業がようやくはじまったと言えよう。

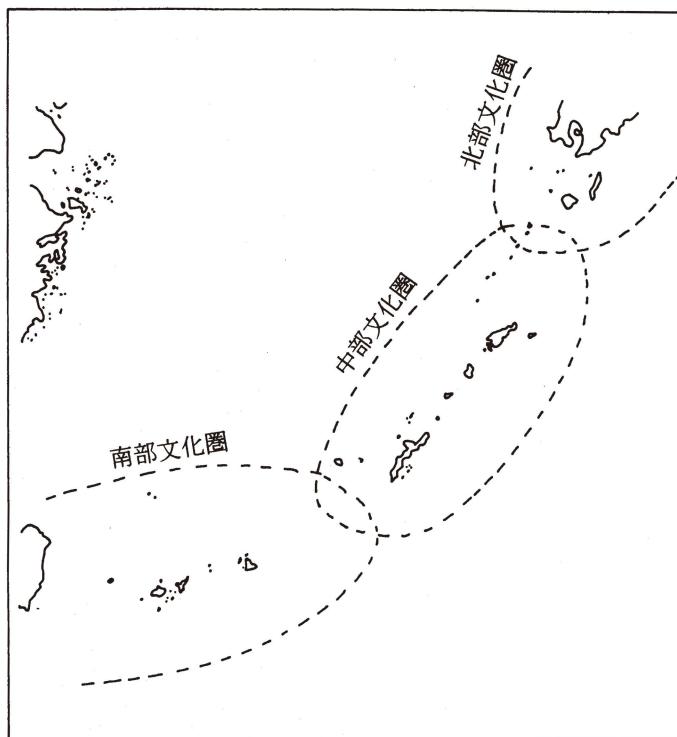
この奄美諸島は5つの主島から成り、喜界島、大島、徳之島、沖永良部島、与論島がそれにあたる。大島本島南部にも加計呂麻島、与路島、諸島があり、遺跡も確認されている。これらの島々を「奄美」とか「大島」とか呼んでいるが、国土地理院では「奄美諸島」として全体を呼んでいることからここでは「奄美」を全体的な呼び名にし、「大島」は大島本島を指す呼び名として記したい。

奄美の中でも特に徳之島、大島、喜界島に遺跡が集中しており、なかでも大島本島北部の東海岸は遺跡群を成している感さえある（第3図）。遺跡も旧石器の可能性の高い喜子川遺跡、国指定の宇宿貝塚、砂丘上に立地するマツノト遺跡、長浜金久遺跡ⅠⅡⅢ、等々が発掘調査されている（第4図）。時代も旧石器から12～13世紀までのグスク時代までを含めると100をこす遺跡になる。ただし、グスクについてはまだ完全な分布調査が行われてないためその数は不明である。グスクは各集落近くに1～3ヶ所は存在していることから今後の調査が注目されるところである。

これらの遺跡の存在する笠利町は大島の中でも最北端に位置し、南北約15km、東西約4.5kmの細長い半島をなしている。半島は南北にのびる高岳、大刈山、淀山等からなりほぼ中央を東西に分ける地形になっている。この最高峰の山でも183.6m（高岳）である。半島全体は大島本島の中でも比較的平地が多いのが特徴である。



第2図 黒潮海流図



第3図 南島文化圏区分図



第4図 笠利町遺跡分布図

第1表 笠利町遺跡地名表

番号	遺 跡 名	所 在 地	備 考
1	用 見 崎 遺 跡	笠利町用見崎	本報告書 第20集
2	用 長 浜 遺 跡	笠利町用長浜	
3	用 遺 跡	笠利町用安良川	
4	辺 留 城 遺 跡	笠利町辺留良川	
5	辺 留 窪 遺 跡	笠利町辺留窪	笠利町文化財報告 No. 6
6	コ ビ ロ 遺 跡	笠利町須野コビロ	〃
7	あ や ま る 第 2 貝 塚	笠利町須野大道	〃 No. 9
8	あ や ま る 第 1 貝 塚	笠利町須野	
9	喜 子 川 遺 跡	笠利町松ノト	笠利町文化財報告 No.13、No.14
10	マ ツ ノ ト 遺 跡	笠利町松ノト	〃 No.17
11	土 盛 遺 跡	笠利町土盛	
12	宇 宿 小 学 校 遺 跡	笠利町宇宿	
13	宇 宿 高 又 遺 跡	笠利町宇宿高又	笠利町文化財報告 No. 2
14	宇 宿 貝 塚	笠利町宇宿大龍	〃 No. 3 国指定
15	宇 宿 港 遺 跡	笠利町宇宿港	〃 No. 4
16	万 屋 遺 跡	笠利町万屋	
17	万 屋 下 山 田 遺 跡	笠利町万屋下山田	笠利町文化財報告 No.16、No.12
18	万 屋 泉 川 遺 跡	笠利町万屋泉川	
19	ケ ジ 遺 跡	笠利町万屋ケジ	〃 No. 6
20	長 浜 金 久 第 2 貝 塚	笠利町長浜金久	鹿児島県教育委員会報告書 No.32
21	長 浜 金 久 第 1 貝 塚	笠利町長浜金久	〃
22	ナ ピ ロ 川 遺 跡	笠利町和野ナピロ川	
23	立 神 遺 跡	笠利町節田	
24	土 浜 遺 跡	笠利町土浜	
25	イ ャ ン ヤ (ヤーヤ) 洞 穴 遺 跡	笠利町土浜イ ャ ン ヤ	1973年三島格、永井昌文調査
26	明 神 崎 遺 跡	笠利町用安入瀬	
27	用 安 遺 跡	笠利町用安入瀬	
28	サ ウ チ 遺 跡	笠利町喜瀬字サウチ	笠利町文化財報告 No. 1
29	鯨 浜 遺 跡	笠利町喜瀬字鯨浜	
30	佐 仁 遺 跡	笠利町佐仁	
31	宇 宿 貝 塚 東 区	笠利町宇宿	笠利町文化財報告 No.18
32	土 浜 ヤ 一 ヤ 遺 跡	笠利町土浜	鹿児島県教育委員会報告書 No.47
33	湊 城 遺 跡	笠利町用安	
34	笠 利 ウ ー バ ル 遺 跡	笠利町笠利ウーバル	
35	宇 宿 戰 浜 遺 跡	笠利町宇宿	笠利町文化財報告 No.15
36	節 田 湊 金 久 遺 跡	笠利町節田	〃 No.16
37	赤 尾 木 保 育 所 遺 跡	龍郷町赤尾木	
38	赤 尾 木 遺 跡	龍郷町赤尾木	
39	ウ フ タ 遺 跡	龍郷町赤尾木ウフタ	熊大考古学研究室活動報告 No.12
40	手 広 遺 跡	龍郷町手広	

### 〈地名表作成、奄美文献〉

1. 三宅宗悦「南島の先史時代」『人類学先史講座16』雄山閣 1941年
2. 河口貞徳「南島の先史時代」『南方産業科学研究所報告』第1巻2号 1956年
3. 国分直一、河口貞徳、曾野寿彦、野口義磨「奄美大島笠利村宇宿貝塚発掘報告」『奄美の自然と文化』九学会連合奄美本島共同調査委員会 1959年
4. 永井昌文、三島格「奄美大島ヤーヤ洞窟遺跡調査概報」『考古雑誌』50巻2号 1964年
5. 『笠利町郷土史』笠利町 1973年
6. 中山清美「名瀬市の先史学的所見」『薩琉文化』8号 南日本文化研究所 1976年
7. 笠利町教育委員会「サウチ遺跡」『笠利町文化財調査報告書2』 1978年
8. 笠利町教育委員会「笠利町高又遺跡」『笠利町文化財調査報告書2』 1978年
9. 笠利町教育委員会「宇宿貝塚」『笠利町文化財調査報告書3』 1981年
10. 中山清美「奄美大島の先史遺跡」『南島史学』17、18号 1981年
11. 笠利町教育委員会「宇宿港遺跡」『笠利町文化財調査報告書4』 1981年
12. 中山清美「先史時代の装飾品、奄美の島じま」『郷土のくらしと文化』新星図書出版 1981年
13. 中山清美「奄美における弥生時代相当期の資料紹介」熊本大学『赤れんが』創刊号 1981年
14. 笠利町教育委員会「ケジ遺跡、コビロ遺跡、辺留窪遺跡」『笠利町文化財調査報告書5』 1983年
15. 中山清美「兼久式土器について」『南島考古』8号 1983年
16. 笠利町教育委員会「あやまる第2貝塚」『笠利町文化財調査報告書7』 1984年
17. 中山清美「フィリピン、バタン島調査記」『笠利町歴史民俗資料館』館報第2号 1984年
18. 鹿児島県教育委員長「長浜金久遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書32』 1985年
19. 笠利町教育委員会「城遺跡、下山田遺跡、ケジⅢ遺跡」『笠利町文化財調査報告書8』 1986年
20. 鹿児島県教育委員会「ケジⅠ、Ⅲ遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書38』 1986年
21. 鹿児島県教育委員会「泉川遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書39』 1986年
22. 鹿児島県教育委員会「長浜金久遺跡（第Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ遺跡）」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書42』 1987年
23. 中山清美「奄美のグスク」『日本考古学論集』9号 古川弘文館 1987年

24. 中山清美「韓国調査記」『笠利町歴史民俗史料館』館報第5号 1987年
25. 鹿児島県教育委員会「長浜金久遺跡（第Ⅱ遺跡）」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書46』 1988年
26. 鹿児島県教育委員会「土浜ヤーヤ遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書47』 1988年
27. 中山清美「面縄前庭式土器」『日本民族文化の生成』九州大学 永井昌文先生退官記念文集 1988年
28. 中山清美「グスク」龍郷町『奄美考古』創刊号 1988年
29. 中山清美「奄美大島における古墳」『奄美考古』創刊号 1988年
31. 田村晃一、中山清美他喜子川遺跡調査団 1988年
32. 中山清美「笠利町の先史時代」『南日本文化』22号 1989年
33. 中山清美「奄美大島の箱形石棺墓」『アジアの巨石文化』六興出版 1990年
34. 笠利町教育委員会「節田湊金久・万屋下山田遺跡」『笠利町文化財調査報告書13』 1991年
35. 中山清美「奄美大島における爪形紋土器」『奄美考古』2号 1991年
36. 中山清美『シンポジウム南島文学発生論』三一書房 1992年
37. 中山清美「奄美と先島」『日本の古代』角川書店

半島を東西に分けたこの“山脈”は“アマンデー”と呼ばれる「天孫降臨最初の地」として女神アマミコ、男神シニレクの二神が“シマ”づくりをしたという伝説がある。アマンデーの山にはこうした伝説を伝える碑があり、明治34年には節田地区民等によって石碑が建立されている。その他にも武運長久を祈る石碑も建立されており、この山が「天孫降臨最初の地」として、また神山として信仰されていることがうかがえる。

笠利半島に東西に分けた山脈は東海岸と西海岸に大きく分けられ、その地形から各集落の生活、文化にもそれぞれの個性が残っている。黒潮の真ん中にある奄美でも東側と西側の漁法にも違いがある。リーフを中心とした漁法と干潟を利用した漁法などがある。東海岸は発達したリーフ、発達した砂丘、広がる後背湿地からゆるやかに大刈山、淀山へと続く地形、そしていくつかの小川が発達した砂丘を分断して海へと流れている。

各集落は海岸よりの発達した砂丘の後方に位置している。現在は集落後方の低湿地とゆるやかな平地は畑地総合計画で整地され、大規模の畑地と化している。これに対して西海岸は大刈山、淀山、高岳から急峻に海に続く地形である。集落は山々に三方囲まれた形で谷間部に広い干潟を有し、前面（海側）が砂丘、そしてその砂丘のはずれに西海岸より比較的大きな川が流れている。現在の集落はこのように湾入した大小の地形を利用して、海岸側に限られている。これは奄美全体の特徴でもある。



第5図 周辺遺跡分布図 S=1:5,000 1/4 挿図

用見崎遺跡は笠利半島の最北端部に位置する。大島本島最北端の遺跡でもある。最北端岬には灯台があり、黒潮が合流する場所もある。用岬の海上は常に流れが速く上と下の海流が逆方行にも流れていると言われキケンな海域でもある。ただし、そのためか魚も豊富で潮の止まるわずかな時間をねらって漁に出かける漁師さんも多い。海岸には黒潮の北上と反流を示す標着物が多い。ハングル文字や中国語、英語などである。北のものや南のものがこの海岸には打ち上げられている。

遺跡の立地する砂丘は約1キロの砂丘が南北に続く、砂丘後方は低湿地で三方大きく山に囲まれている地形である。<sup>(注1)</sup> 砂丘の残りは比較的良好である。部分的に砂取りが行われていたが、砂取り現場からは遺物の検出はなかった。おそらく小規模な遺跡がこの大砂丘の中でもだいいくつか存在しているのであろう。<sup>(注2)</sup> 長浜金久遺跡がそうであったようにこの砂丘も同様であろう。砂丘南側には小さな小川が流れしており、また砂丘後方は南北に構も入っている。この構は以前舟が入って来るぐらい大きく海上から砂丘後方に舟で行けたという。当遺跡の後方にも大きな構が今も残っており砂丘と田んぼとに分けられている。

そのような状況から察すると砂丘後方の低湿地はかなり大きく海水も入り込んでいたと思われる。古代人にとっては素晴らしい良港でもあったと考えられる。

(注1) 白木原和美「奄美先史学の当面する諸問題」『琉大史学』6号 1974年

(注2) 鹿児島県教育庁文化課「長浜金久遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財報告書32』

1985年

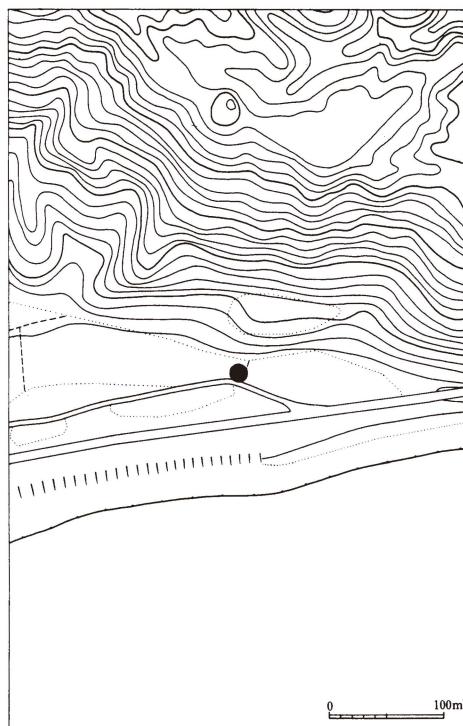
## 第2節 遺跡の概要

用見崎遺跡はこれまで白木原和美が「大島郡笠利町の先史学的所見」<sup>(注1)</sup> の中で用遺跡として紹介しているのと同じ遺跡である。同様にこれまで筆者が「郷土館のしおり」<sup>(注2)</sup> で用遺跡と紹介しているもの、笠利町文化財案内で「用長浜遺跡」と最近まで呼んでいたものである。

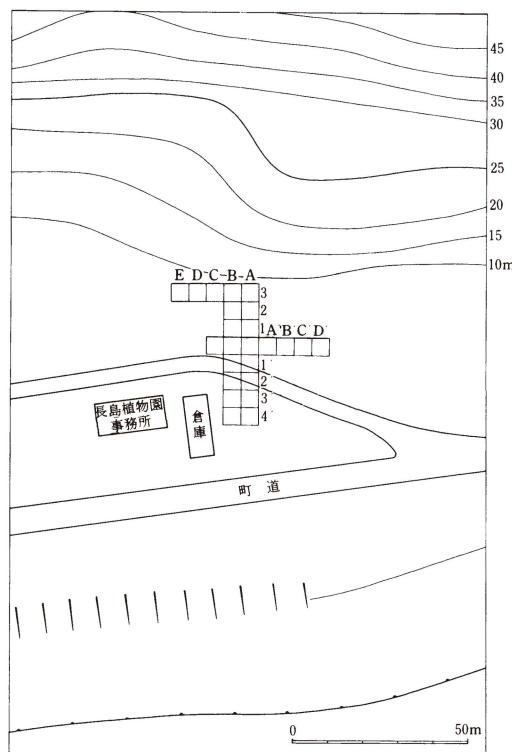
今回の調査によってこの大砂丘全体を「長浜」と呼称しており、長浜もいくつかの字名がある。地籍調査に基づいて発掘調査を行った場所は「用見崎」字であることから遺跡名もこれまでの「用長浜遺跡」から「用見崎遺跡」に改めた。正式にはその地名が使われるのが良いことと今後長浜からは同様な小規模遺跡が発見される可能性があることからそのようにしたい。

用見崎遺跡は文献では前述した二つの論文があり、発見年月日ははっきりしていない。ただし、白木原、中山の踏査でこれまで数回にわたって遺物が発見されている。今回発見されたものと同様の兼久式土器である。

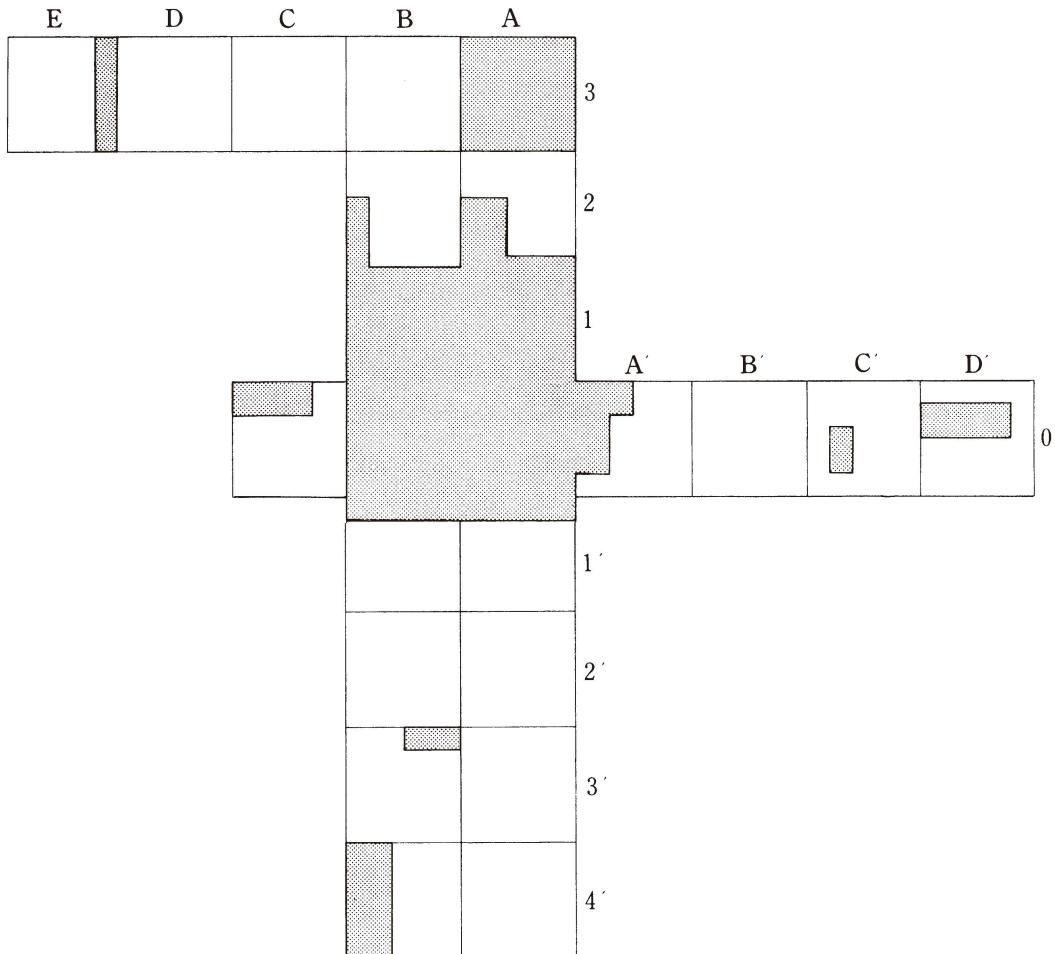
調査は確認調査ということもあって植物の植込みの少ない場所を選び、グリットを設定して行われた。西側から東側に向けてのゆるやかな傾斜地で南北は構で切られている。構



第6図 発掘調査区域位置図 S=1:2,000



第7図-1 発掘調査グリッド設定図 1



第7図-2 発掘調査グリット設定図 2 S=1:125

より山手は粘質土で構なり東側（海側）が砂丘になっている。この両方にグリットを組んで調査を行った。その結果砂丘部分では10m×10mの範囲におさまり、他に遺物の出土はない。山手の方は粘土質であるが、遺物も入っている。田んぼの可能性が大である。今後の分析や調査がまたれる。

砂丘上からは単純層で遺物包含層も一枚である。中央部分に住居跡が2棟発見された。遺物は兼久式土器の古いタイプのものである。同類はマツノト遺跡からも出土している。マツノト遺跡の下層とほぼ同一時期と思われる。兼久式土器と壺、石器、貝製品も出土している。貝製品はシャコ貝製の加工品もあり、用途不明であるがきれいに磨かれている。ホラガイ製の容器の他に注目されるものは広田の上層タイプの貝符が1点出土している。これはこれまで兼久式土器と伴って検出されたことはない。これで兼久式土器の時期考察に大きな第一歩を踏み出すことになる。小規模遺跡で構を挟んで山手に田んぼの可能性があり、砂丘上では兼久式土器の方形住居、広田上層タイプの貝符の発見で、この時期のセ

ット関係が明らかになる。今後はマツノト遺跡との比較で用見崎遺跡は重用なキーポイントを握っているといえよう。今後の調査が楽しみである。

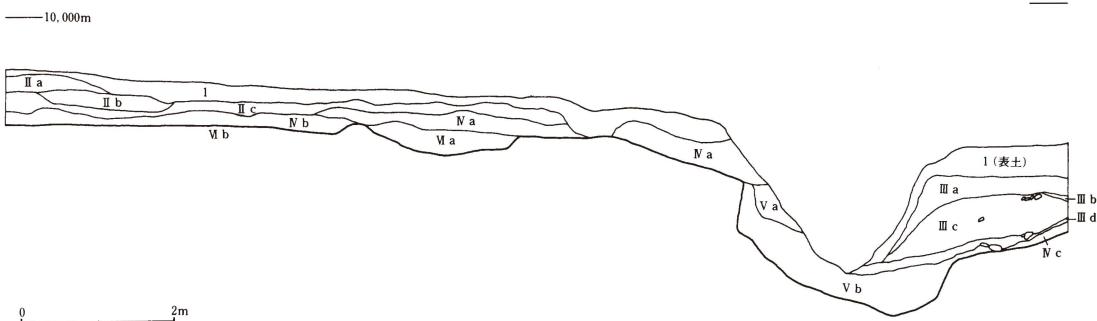
(注1) 白木原和美「大島郡笠利町の先史学的所見」『南日本文化4号』南日本文化研究所 1971年

(注2) 中山清美「郷土館のしおり」笠利町教育委員会 昭和52年11月

### 第3節 層序

用見崎遺跡は全体が砂丘で旧砂丘にあたる。山手の方は山砂がかなり入っており、下層は泥炭層である。基本的層序は第8図のとおりである。砂丘をかなり分けているが表土から遺物包含層までの間は無遺物層である。遺物包含層は砂丘遺跡で良く言われる層の前後が入れ替るということは認められなかった。

- I 層 表土、植物の根が多い。
- II a層 表土直下であるが、砂丘の堆積状況からa、b、cと分けた。
- II b層 白砂層であるII aの下になるが基本的にはII aと同じである。
- II c層 白砂層である。II bと同じであるが2 b層とやや色調が分けられた。
- III a層 3層は西側の層になる。遺物包含層から見るとIII a b cは同一層であるが色調や粘土層で区別した。a層は砂質まじりでマイマイ等を多く含む。
- III b層 部分的褐色をなす。遺跡全体に広がるかどうかは不明である。
- III c層 aにくらべ粘土層まじりである。マイマイは少ない。
- IV 層 VIは遺物包含層である。A、B層に分けたのは色調の違いが少し認められたためであるが基本的には同じと思われる。
- V 層 白砂層であるが川底のしみ込みがあり、褐色砂層である。夜光貝なども散乱している。a、b層とも基本的には同一層であるが色調の違いで分けた。
- VI 層 白砂層である。V層と同様と思われるが、全体的に深く下げて確認をしてないために区別した。



第8図 基本層序図 S=1:50

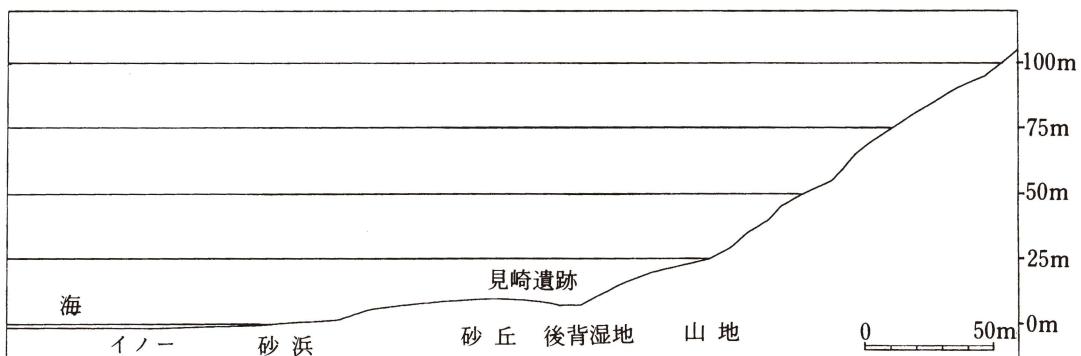
#### 第4節 砂丘

砂丘の形成については縄文時代の遺物、遺構が沖積層の中に存在することはこれまでの調査で明らかになっている。“沖積層”と呼ぶのは最終氷期最寒冷期に海水準の低下に伴う下刻によって形成された不整合面をおおって堆積した地層で今から約2万年前から1万8,000年前にかけてのことだという。日本では“沖積世”“洪積世”という用語が使われているが、旧石器時代の研究等及び第四紀の地質年代区分の用語ではあまり使われていないのが現状だろう。これはMANTELL (1822) による定義以来永い間、ドイツ語で呼んで来たことに由来する。現在ではLYELL (1830) やOSBORN (1915) によるPleistoceneが一般的に用いられている。

砂丘形成時の沖積層の基本層序はサウチ遺跡でも確認されたように下位より、下部砂泥互層、中部海成粘土層、上部砂層の順に重なる。これは竜郷町手広遺跡にも例を見ることが出来る。ただし、年代的には地域や地形によって違ってくるので、全体的にこの層位が鍵層になるとは思えない。鍵層としての重要な役割を果す火山灰層はAT火山灰層は不整面直下の更新統最上に狭まれることから、喜子川遺跡の層序結果が奄美では唯一確認されているものである。

古環境変遷のなかで重要なできごとは気候の温暖多雨化とそれに伴う海水準上昇であり最終氷期最寒冷期には海水準が100m以上も下降している。奄美ではかなり大きくなり、南部の加計呂麻島から徳之島までは陸続きになっていたんだろう。これは日本でも同様で広大な内陸盆地となっており、縄文海進の海水はこの内陸盆地を内海に変え、さらに山間盆地も内海に変えている。これがいわゆる縄文の海進、海退で良く言われているところである。

現在よく論議される環境考古学は低湿地と砂丘地及び全体的な地形から考察して行われるものと理解する。奄美においてはリーフと湾入した低湿地、砂丘、砂丘後背にある低湿地等を含めた環境を考察しないとのちに本格的な弥生期におこる砂丘形成のとらえ方に問



第9図 遺跡地形断面図 S=1:1,000

題を残すことになろう。奄美における遺跡の立地も湾入した周辺部分に位置することからも理解出来る。特に宇宿貝塚周辺の地形がそうである。宇宿港遺跡、宇宿小学校遺跡、宇宿高又遺跡、宇宿貝塚等はいづれも湾入した周辺台地砂丘上に形成されている。砂丘の新旧にもよるが、このような状態は奄美の先史人達の海への依存度が高かったと思われる。もちろん島全体が海に囲まれているので外洋との接触は多かったであろうが、山中及び赤土に形成される遺跡が大島本島では少ない。そのほとんどが砂丘遺跡である。ただし貝殻などの自然遺物が検出されない遺跡もサモト遺跡などにみられるように二、三例はある。

砂丘の層位はその埋積層をしっかり確察しないと砂丘形成時期を見失ってしまう危険性を含んでいる。人工遺物と自然遺物、また一群の型式が同時使用を示す層序。当時の自然環境等を復元しながら遺物包含層をとらえていくことは必至であろう。長浜金久遺跡では貝殻を採集し、投棄された貝だまりが検出されている。これらはけっして同時投棄ではなく、一定の時期として考えられるだろう。砂丘全体に広がる貝殻が同時に投棄されたものでなく、一定期間をもって投棄された、その状況がわかるということである。砂丘遺跡にはそのような出土状況から共存関係も良く観察しやすい。しかし砂丘の移動や遺物の浮沈等もあることから前述したように砂丘全体の形成を把握する必要があろう。

奄美においては発達したリーフと砂丘、砂丘でも古砂丘、新砂丘、現砂丘と大別出来る。これらは出土遺物からも時代差がはっきりしている。喜子川遺跡においては砂丘中にアカホヤ火山灰層も含まれており、その上層に爪形文を出土する遺物包含層がある。砂丘形成上西側は埋積が薄く、東側（海岸側）においては2mをこえる砂丘の埋積が見られた。ただし、風成砂層なので約6m西側に行くと砂丘は消えている。砂丘の形成を知る上で充分勉強になった遺跡である。そのような状況から、砂丘はまるで「生きもの」のような感がする。

## 第3章 用見崎遺跡の調査

### 第1節 遺構

#### 1. 1号住居跡、2号住居跡

1号住居跡は遺跡のほぼ中央部分に位置する。そのほとんどは盗掘による近年の攪乱である。わずかに東側部分が残っており、住居跡のコーナー部分が残る。部分的に貝も入っているが、プランはやや不明瞭であった。

2号住居跡はプランも明瞭で方形である。一部分が南側に入るが $15m \times 10m$ の大きさである。この建物址の特徴は内部に貝の散乱がなく、小規模である。これだけはっきりした形で検出されたのもはじめてである。

#### 1号と2号の時間的関係について

1号と2号は構築位置がほぼ同じ方向で接近しすぎており、通常の掘立柱建物の家屋構造と同様の建物を有したと考えるならば、同時に2棟並んで構築されていたとは考えられない。1号のプランが不明瞭で貝が散乱している状況から時間差を考えると、1号廃絶後に2号が構築されたと考えられる。ただし、そんなに長い時間差はなかったと思われる。

この時期の建物址が確認されたことは奄美ではもちろん初めてである。しかも砂丘遺跡での検出はなかなか難しい。今回は遺跡が小規模にまとまっており、遺跡全体に貝が散乱しているのに対し、この部分だけが方形プランで明確に確認出来たためである。きわめて貴重な発見である。ただし、ピットの検出は出来なかった。砂丘上のピットの検出はよっぽど保存状態が良くないと見つけることは難しいと思われる。

#### 2. 構状遺構

遺跡の西側はずれに大きな構が確認された。貝や土器などの出土遺物もこの構の斜面部分からも出土していることからこの遺跡に伴う構である。土層断面図にも確認出来るが、遺跡西側は一段下っている。この構は現在も排水溝として使われており、この地形はあまり変化していない。構の西側部分は粘土層も入っており、近年まで田んぼとして使っていたという。水はかなり豊かで大正、明治の頃まではこの構の部分までサバニ（舟）の水路にもなっていたという。ただし、構全体の大きさやその後背にある底湿地の調査は行われていない。南西側はかなり深い田袋のためその可能性も充分考えられる。大きな湿地帯を後方に、前面には海、そして湿地帯と砂丘の間にはボートを浮かべるような川でつながるという生活するには恵まれた環境にあったと言えよう。

この構状遺構については後方の湿地帯と共にもう一度本格的な調査を行う必要がある。プラントオパールを行い、栽培植物の可能性も充分考えられる。



第10図 遺構、出土遺物分布図（……内は貝だまり）

## 第2節 出土遺物

用見崎遺跡からの出土遺物は主に貝ガラ、石器、土器、貝製品である。土器においてはこれまで報告されている兼久式土器の範疇に入る土器である。兼久式土器の単純遺跡であり、数タイプの土器が出土したことは今後の兼久式土器の分類に大きな指標になると思われる。

### 石器

石器の出土数は少なく、完全な形をしたのは表採資料の石皿のみである。他は磨石片である。第10図は磨石片であるが、二次利用されている。全体的に石器は少なく、遺跡中央部分に石皿が貝を割るのに利用されていた大きな石が目立つただけである。石皿周辺には確認された貝片が多く散らばっていた。

## 貝製品

貝製品は生活用品と漁具、装身具に分けることが出来る。生活用品とされるものにはホラガイ製容器が2点、漁具として貝スイが30点、貝輪2点、貝小玉18点、貝符（貝札）1点。夜光貝製の貝ヒの材料として使われていた資料は多く出土しているが製品はなかった。

貝スイの出土が多いのはすでにリーフを利用した網漁法が行われていたと思われる。二枚貝やシャコ貝を利用しており、同様な資料はマツノト遺跡からも出土している。二枚貝やシャコ貝を利用しており、同様な資料はマツノト遺跡からも出土している。二枚貝は殻頂部分に孔を有している。

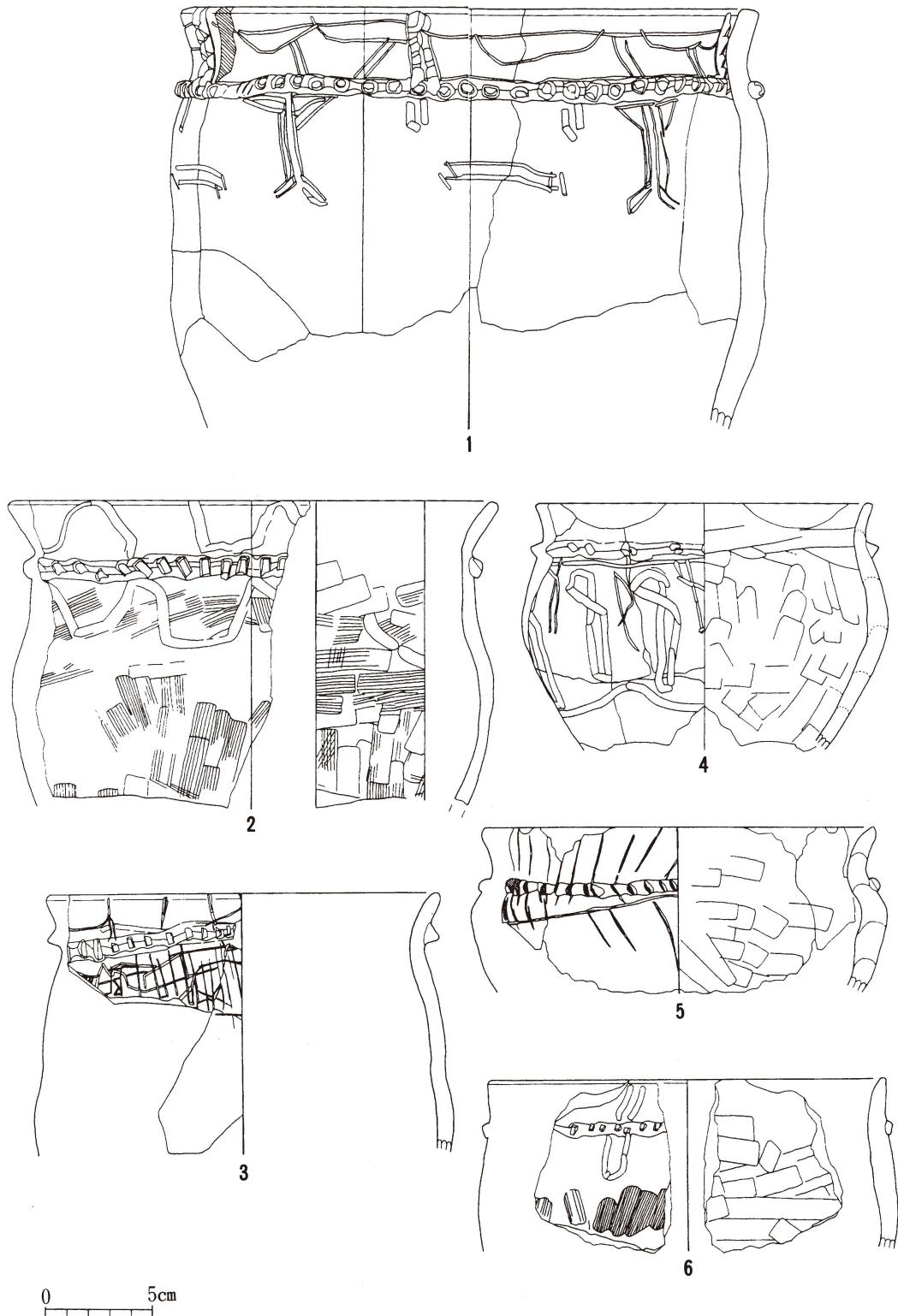
貝小玉は巻貝の殻頂部分を利用して仕上げている。殻頂部分は砂浜に落ちている貝を拾ってつくると比較的楽につくることが出来る。自然に波に洗われて貝小玉のようになっているものもある。殻頂部分には自然に孔も空いているので人工遺物か自然遺物かの判断は注意が必要である。本遺跡出土のものは自然遺物に少し手を加えた程度のものもあることから、波打ち際から自然の貝を拾って来て加工したものと思われる。

貝輪は2点の出土である。オオツタノハ製とシャコ貝と思われるがいずれも貝種についての調査は行っていない。第16図2はその特徴からオオツタノハと思われる。成長線がはっきりしており、外套痕もある。腹線から約2.6センチの幅で殻上部分がけずられている。成長肋は一部分が削られている。また貝輪端は1ヶ所は磨かれているがもう1ヶ所は途中までしか磨かれてない。このため貝輪を製作途中に1ヶ所が折れたためあきらめたものと思われる。未製品である。第16図1はシャコ貝製と思われる。シャコ貝の外唇部分を利用したと思われる。外殻面、上下面、両端ともきれいに磨かれており、乳白色をなしている。貝輪の形をしているが両端が内外からとがれており、何らかの利用法が他にあるのかも知れない。右端は先端部分が削られているが、左端部分は刃をなしている。製品である。

貝符（貝札）はイモ貝製と思われるが、他の貝同様に貝種についての調査は行っていない。貝の表部分はきれいに磨かれ彫刻がなされているが、内側は自然の貝の光沢が残っている。全体は長方形をなすものと思われるが、半分は欠損している。貝中央部分には方形の沈線があり、中央に小さな孔を有する。いわゆる「メガネ形」である。広田の上層式タイプに類似する資料である。広田上層タイプの文様であるが、貝に厚みがなく薄い貝の面取り部分も雑であり、貝符としてはやや雑につくった感がする。

ただし、このような貝符が兼久式土器と一緒に出土したことは初めてである。貝符及び、兼久式土器の編年にも参考にされよう。

夜光貝のフタの利用についてはこれまで貝斧とか利器とか言われているが、フタの機能や用途的なものから考えると敲打器であり、正式には貝製敲打器として早目に名付ける必



第11図 1類土器

要があろう。ここでは機能や用途的な実験資料の結論集についてくわしく報告出来ないため貝製敲打器として仮に使うことにする。この貝製敲打器は全部で43点出土している。夜光貝の貝背部分を取るのに使われたと思われる。また貝を荒化工する道具としての用途もあり、実験の結果フタの敲打器が、全く同じようになる。遺跡から出土する遺物と同じであり、フタの利用については敲打器として使われていたといえよう。

他に自然遺物としてウニ、漁骨（ベラ、ブダイ等）、ジュゴン骨などが出土しているが自然遺物についての調査は行っていない。第4章の自然遺物には貝類についてのみ報告をした。

### 土器

土器資料は口縁部203個、底部47個、胴部882個である。形器は口径と器高がほぼ同じ位であり、口径が器高を上まわっている鉢形もあり、甕形もある。完全に器高のわかる資料が少ないので、ここではこれまで鉢として扱っていたため鉢形として使う。

土器は鉢形土器と壺形土器の二種類に区別される。形態的には用途や機能が同じと考えられ、くびれ平底で葉痕を有する土器として共通することから同一形態である。文様や器形にはいくつかの違いが認められており、それらの特徴的なものを分類してみた。兼久式土器については数タイプに分類されるだろうということは南島を研究されている多くの諸氏が同一意見である。ここでは分類は行うが、土器の編年については他資料との比較などを行っていないため今後の課題として、土器資料の報告にとどめたい。

#### 1類土器（第11図）

1類土器としたものには貼り付け凸帯文を有し、文様が凸帯文上下に刻されているのが特徴である。文様構式は器によってそれぞれ違っている。凸帯文を管状のものを押したものやヘラ状のもので押したものなど施文具が違っている。ここでは凸帯文の上下に文様を刻しているものとしてだけで1類とした。

#### 2類土器（第12図）

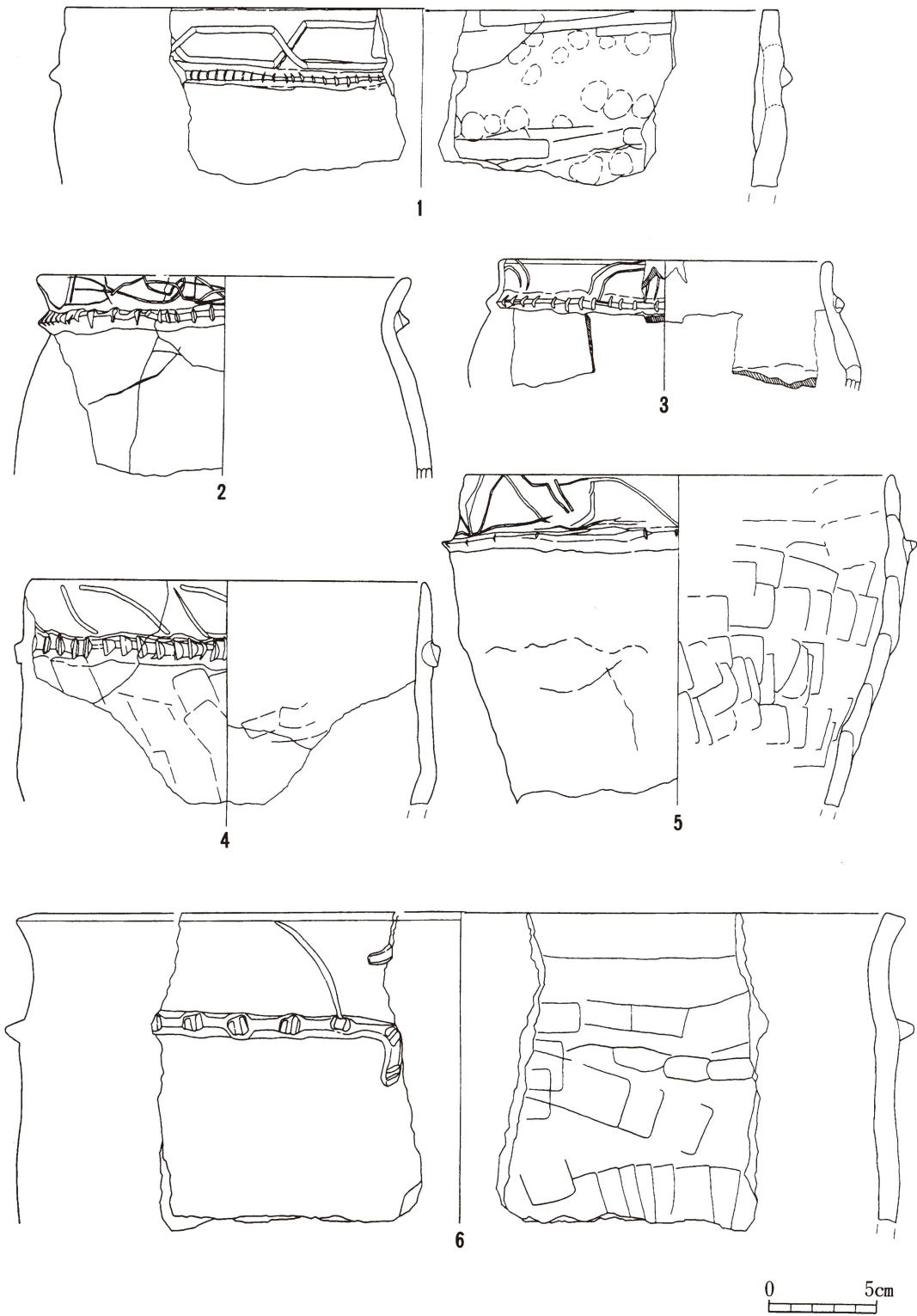
2類土器は1類土器同様に刻目凸帯文を有するが、文様が凸帯文の上部で口縁部分に有する1類土器同様に施文具は棒状のものや先端の尖ったもので、波状沈線や波線で交錯させている。器は直口のもの、やや外反するもの、やや内反するものなどがある。

#### 3類土器（第13図）

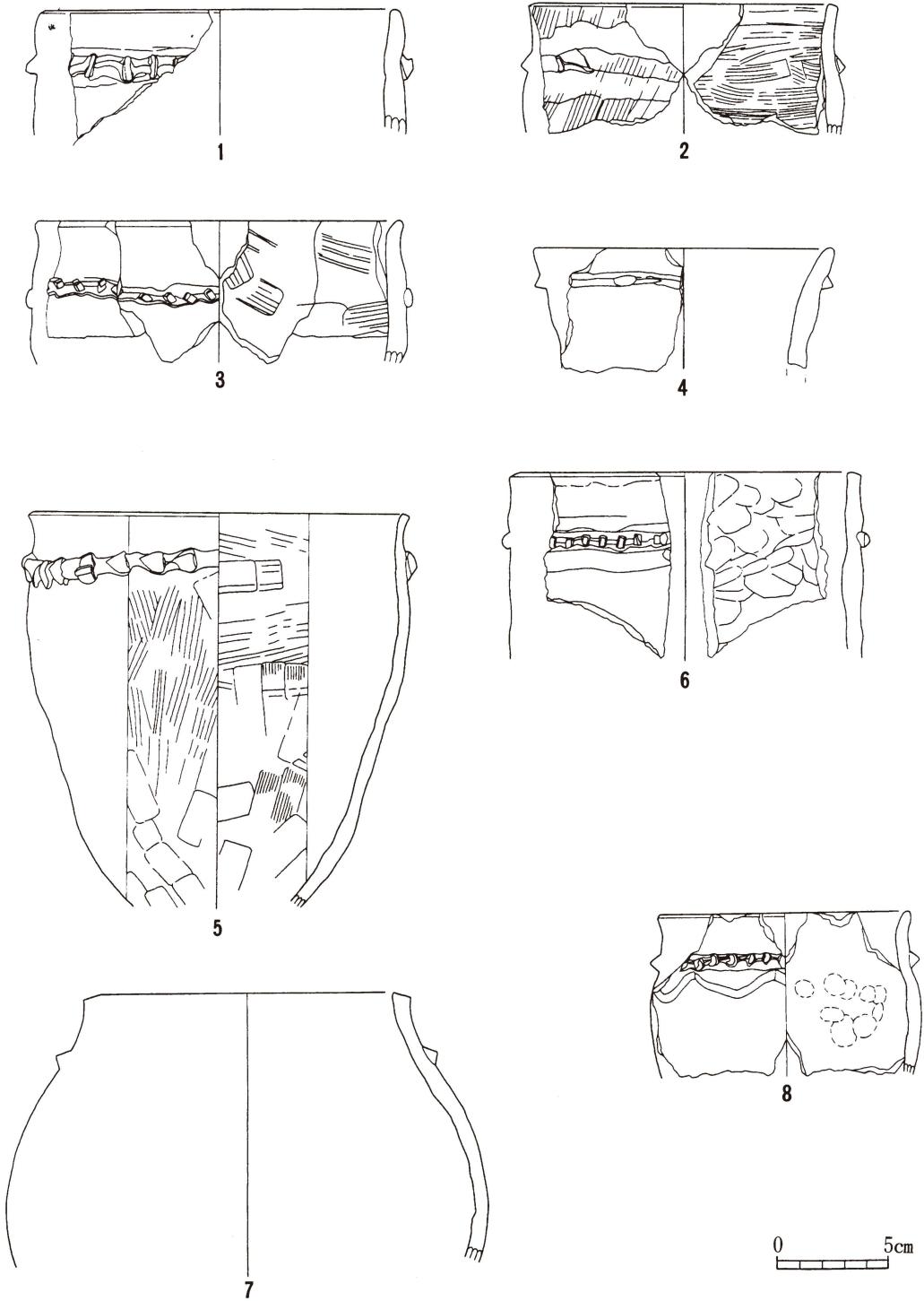
3類土器は貼り付け凸帯文を一条めぐらすだけの土器である。凸帯文は1、2類土器同様に刻目凸帯である。刻目の入れ方は1、2類同様に施文具が違う。

#### 4類土器（第14図）

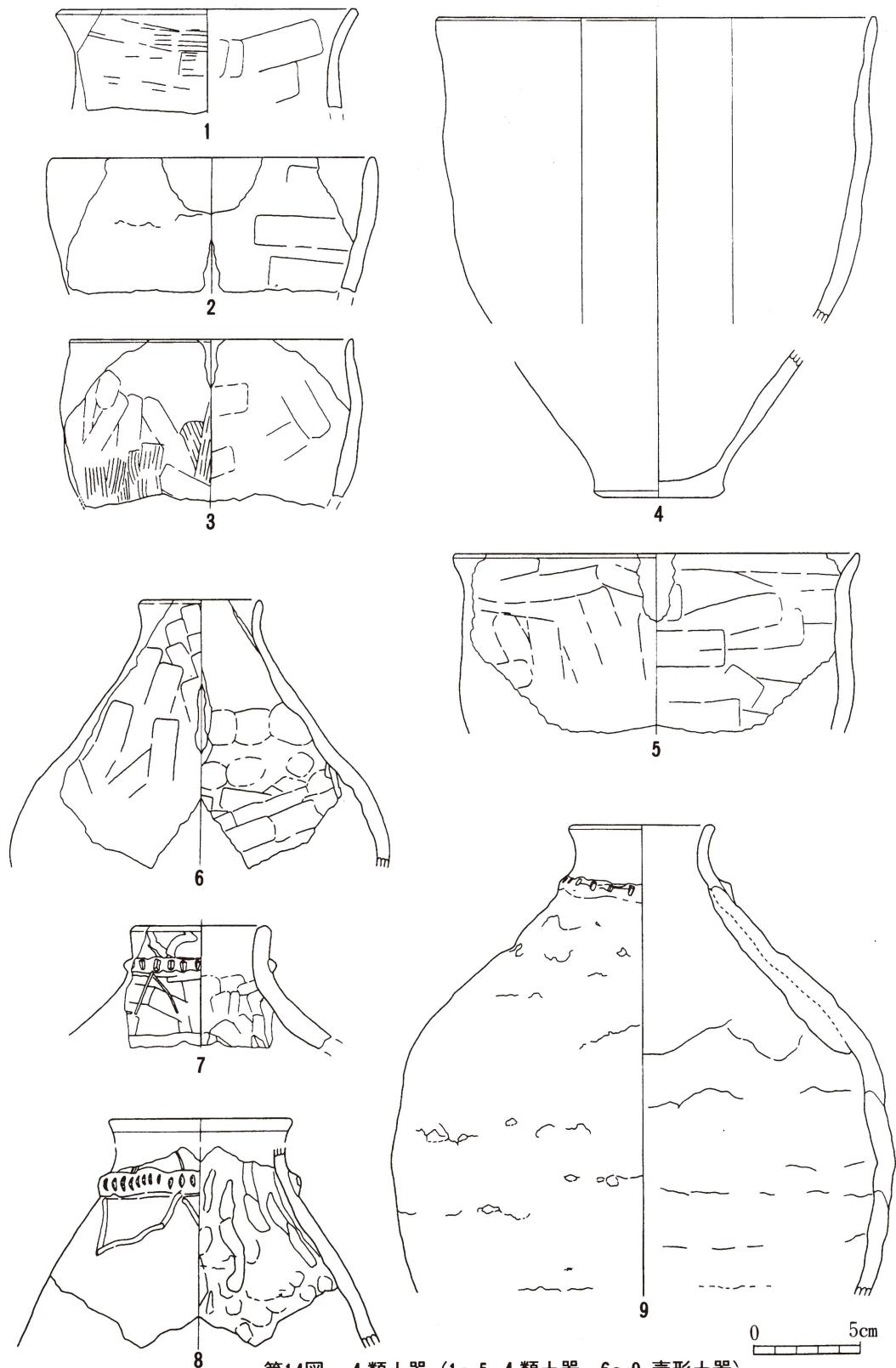
4類土器は無文である。刻目凸帯もなく、文様帶もない無文土器である。口縁部分もやや外反するものや直口のものもある。



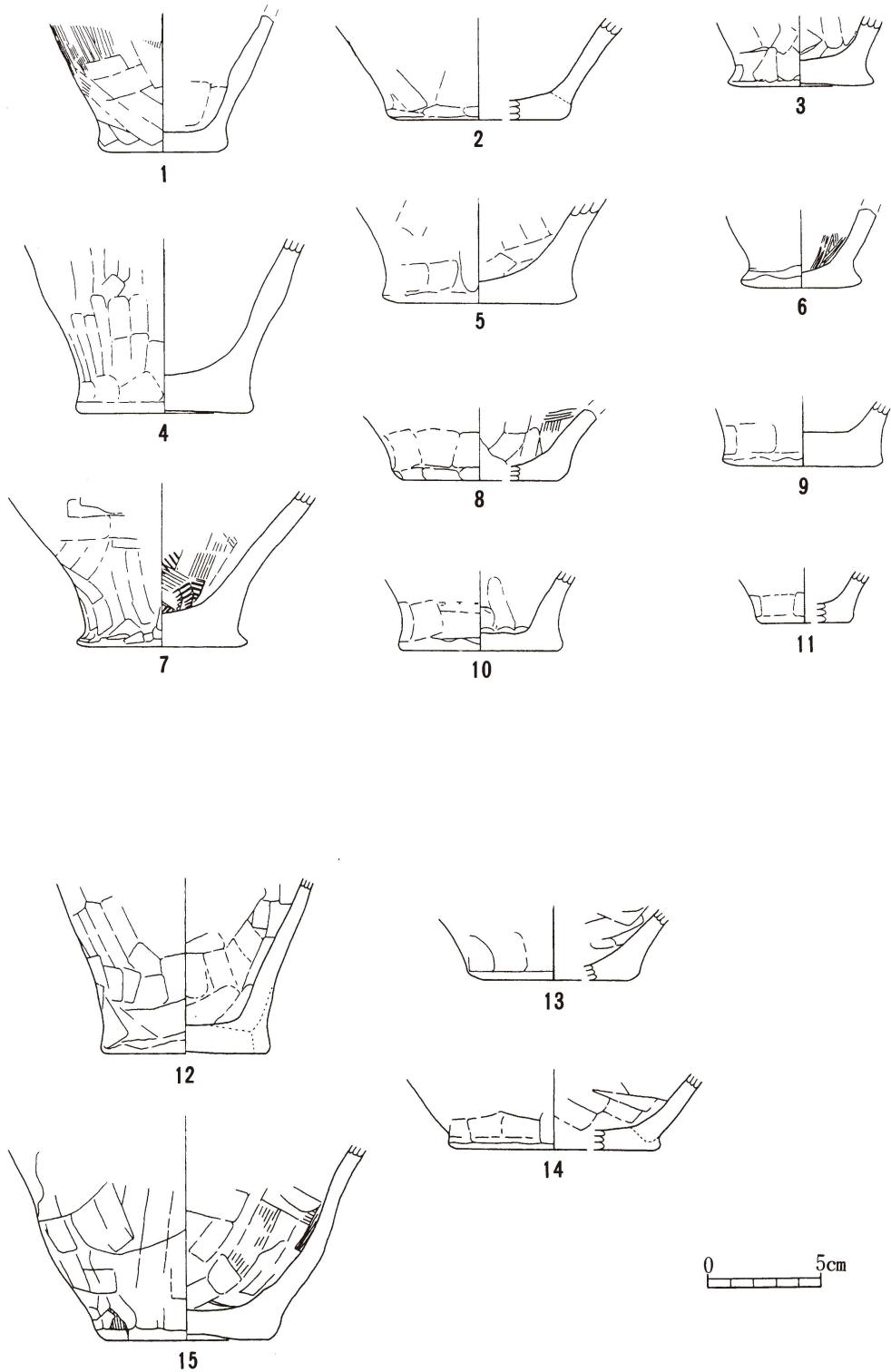
第12図 2類土器（6はその他の土器）



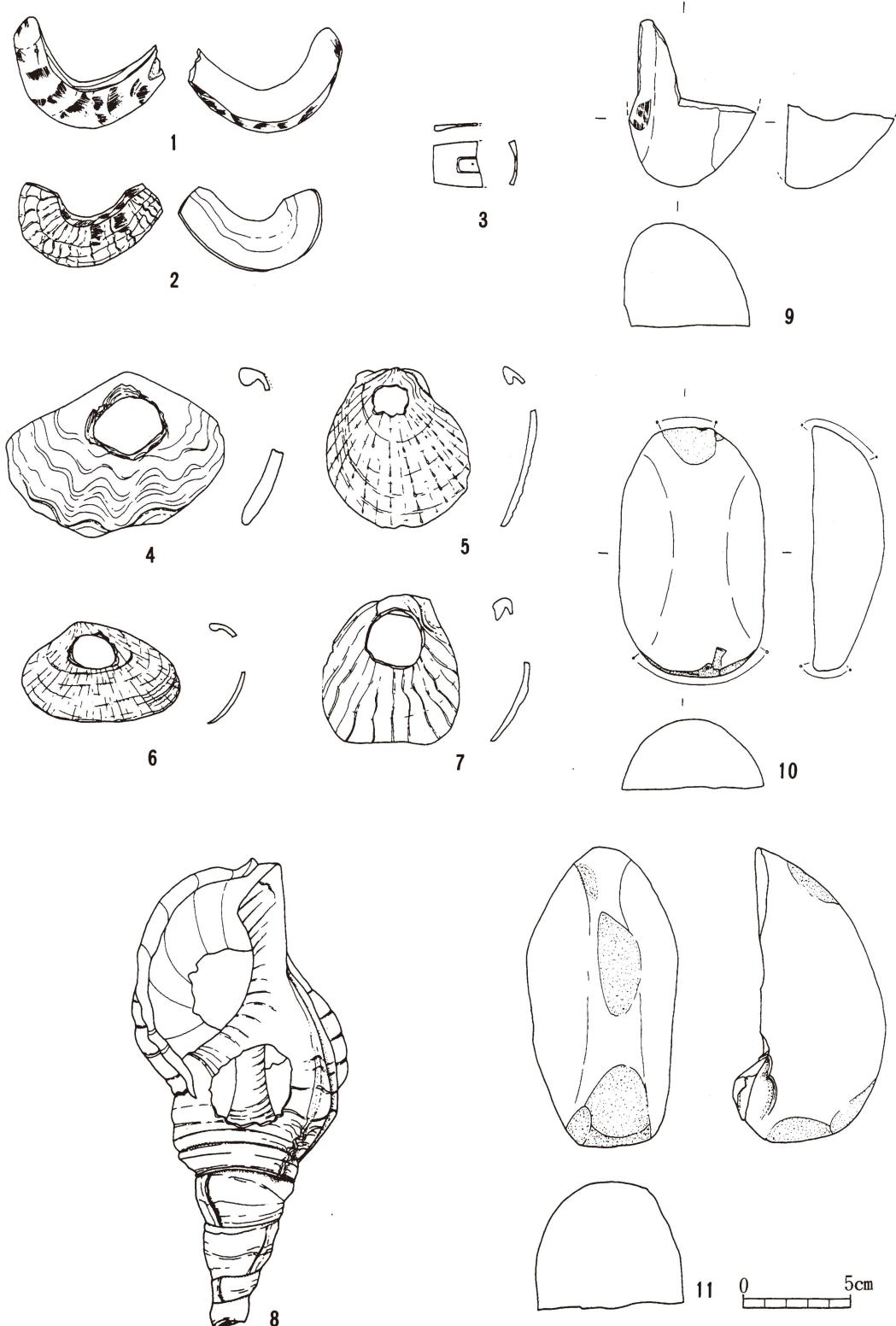
第13図 3類土器



第14図 4類土器 (1~5 4類土器 6~9 壺形土器)



第15図 土器底部 (1~11 葉痕を有する 12~15 葉痕を有しない)



第16図 貝・石器

### その他の土器（第12図）

その他の土器として刻目凸帯文を縦位に口縁部内側まで達する。また凸帯文で文様帶をなそうとするものがある。1類土器の1に類似するが、厚みがあり、焼土も良好でがっしりした土器である。

### 壺形土器（第14図）

壺形土器は量的に少ない。1～4類土器は全体的にザラザラした感じで色調も黒褐色であるのに対し、壺形土器は粒子が細かく、赤褐色をなしている。外器面は器調成されているが内器面は成作時の指頭圧痕などが残っている。頸部に一条の貼り付け凸帯文を有するものと無文のもの、沈線を有するものなど3タイプがある。

土器全体については鉢形土器は粒子があらく、色調も全体的に褐色から黒褐色である。壺形土器は粒子が細かく、色調は赤褐色をなしている。共通するのに底部があるが、底部については壺形になるもの、鉢形に付くものの区別がつきにくい。底部はほとんどがくびれ平底で葉痕を有している。1点だけ丸身を持つ底部があるが、土器片が小さいため不明である。

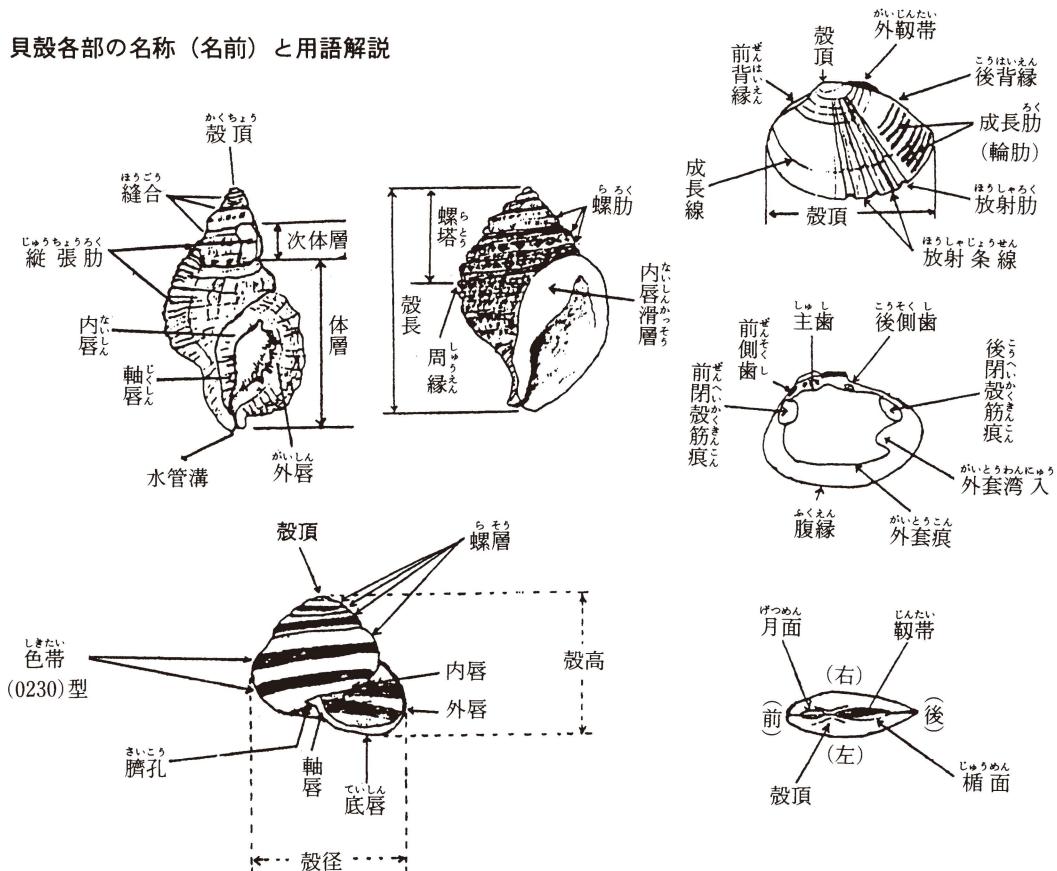
大半がオオハマボウ（ユウナ）の葉を敷いて回転台的に粘土を積み上げて作っており、底部には葉痕がついている。用見崎遺跡からはこれらの兼久式土器の特徴である葉痕を有しない底部が4点確認された。いずれも赤褐色で粒子が細かい。壺形に付く底部の可能性が高いが今後の資料の増加をまちたい。

用見崎遺跡においては、壺形土器も鉢形土器もくびれ平底で葉痕を有する土器と言えよう。土器片の中には胴部分であるが内面が器面調成されており、条痕が横位に斜位に入り交った条痕を有する土器もある。これらの土器は今後土器成作時にどのような影響を受けたか、またどのような状態であるかこれも資料の増加をまちたい。

# 第4章 自然遺物

## 第1節 貝殻各部の名称と用語

### 貝殻各部の名称（名前）と用語解説



○外唇—殻口の外側の部分。

○外套膜—貝の体（軟体）をおおう筋肉質の膜。タカラガイでは外套膜が殻全体をおおっているので殻の表面がつやつやしている。外套膜から出される物質で貝殻がつくられる。

○殻頂—殻が最初にできた部分。

○滑層—貝殻の表面がすべすべしたところ。

○肩角—各螺層の上部にある角ばった（肩状の）部分。

○臍孔—巻貝が巻きながら成長していくときできる穴。軸唇のところにある。

○軸唇—内唇から水管に続く部分。

○次体層—体層の一段上の層。

○縦張肋—殻の軸（殻軸）に平行に隆起し、ふつうの縦肋に比べて、著しく太い。そこ

で成長が一度とまっている。

- 縦肋—殻の軸（殻軸）に平行で規則的にできた隆起。
- 鞘帶—二枚貝の殻頂の後部（後背縁）にあって両殻をつなぎ合わせている部分。外側から見えるものを外鞘帶という。
- 水管溝—殻口の下端（前端）に伸びた管状の部分。
- 成長線—成長につれてできた細い線。
- 成長脈—成長線にそって隆起している部分。
- 成長肋—成長脈の中で特に太くなった線。
- 足糸—二枚貝が殻を固着させるために出した糸の束。
- 体層—巻貝の最終螺層のこと、体（軟體）の大部分がおさまっている部分。
- 体層周縁—体層が最もはり出している部分。単に周縁ともいう。
- 頂口—ツノガイ類の殻頂にある穴。肛口ともいう。
- 内唇—殻口の内側の部分。
- 内唇滑層—内唇から広がるすべすべした部分。
- 閉殻筋痕—左右両殻の開閉のために前後にある筋肉（貝柱）についていた部分。
- 縫合—螺層と螺層の合わせめの部分。
- 放射彩—殻頂から周縁部に出る放射状の色帯。
- 放射肋—殻頂から周縁部に出る放射状の肋。
- 螺糸—巻貝の成長の方向にある平行な最も細い隆起。
- 螺層—巻貝の軸（殻軸）のまわりにある管状の部分。（縫合と縫合の間の部分）下の方から体層、次体層、中間層、初生層などがある。
- 螺塔—殻頂から体層周縁までの部分。
- 螺肋—巻貝の成長の方向にある太い隆起。
- 輪状肋—輪肋のこと。
- 輪脈—成長線のこと。
- 輮肋—成長肋のこと。

### 海産巻貝類

巻貝には次の①～⑥のようなものがあげられる。

- ① 体の背側に巻いた殻をもっている—イボアナゴ、アマオブネガイ、ニシキウズガイ
- ② 体の背側にかさ形の殻をもっている—リュウキュウウノアシガイ、コウダカカラマツガイ、ヨメガカサガイ

- ③ 二枚の殻をもっている—ユリヤガイ、カメガイ
- ④ 浮遊生活、またはプランクトン生活をする—アサガオガイ、カメガイ
- ⑤ 殻は退化的で小さい—アメフラシ、タツナミガイ、ヒトエガイ
- ⑥ 殻をもたない—イソアワモチ、ミカドウミウシ

巻貝とは「体の背側に巻いた殻、またはかさ形の殻をもち、足のうらは広くて大きい。」といわれている。生息場所も潮上帯（しぶき帯）から深海までのきわめて広い範囲である。潮上帯は荒天のとき波しぶきがかかることがあっても定期的に海水にひたることはない。アラレタマキビガイ、テリタマキビガイ、イボタマキビガイなどが生息している。その外、私たちの目にふれるほとんどの貝は潮間帯（最低潮線と最高潮線の間）に生息している。特に潮間帯の潮だまりにはえさになる海ソウ類も多く、貝類のみならず他の動物たちの絶好の住みかである。

## 第2節 リーフ内に棲息する貝類

現在リーフ内に生息している貝類は調査期間中及び、地元の方々がリーフ内から採集した貝を見せて頂いたものを記録するにとどめたい。

第2表 貝類一覧表

番号	和名（科名）	分布	番号	和名（科名）	分布
	巻貝（腹足類）			※イトマキボラ科	
	※カサガイ類		32	ナガイトマキボラ	紀伊以南
1	オオベッコウガサ	奄美以南	33	リュウキュウツノマタ	紀伊以南
	※ミミガイ科		34	イトマキボラ	四国以南
2	フクトコブシ	九州南部以南		※イモガイ科	
3	マアナゴ	紀伊以南	35	イボシマイモ	房総以南
	※ニシキウズ科		36	アジロイモ	種子島以前
4	オキナワイシダタミ	紀伊以南	37	マダライモ	紀伊以南
5	ニシキウズ	紀伊以南	38	ヤナギシボリイモ	紀伊以南
6	サラサバティラ	奄美以南	39	クロフモドキ	種子島以南
	※リュウテン科			※タケノコガイ科	
7	リュウテン	種子島以南	40	ペニタケ	紀伊以南
8	オオウラウズ	種子島以南			
9	チョウセンサザエ	種子島以南		陸産	
10	ヤコウガイ	種子島以南		※ナンパンマイマイ科	
	※ムカデガイ科		41	オオシママイマイ	奄美以南
11	リュウキュウヘビガイ	高知以南		※オナジマイマイ科	
	※アマオブネ科		42	オキナワウスカワマイマイ	奄美以南
12	オオマルアマオブネ	奄美以南			

番号	和名(科名)	分布	番号	和名(科名)	分布
13	アマオブネ ※オニノツノガイ科	房総以南		節足動物 ※フジツボ類	
14	オニノツノガイ ※タカラガイ科	種子島以南	43	クロフジツボ	本州以南
15	ハナビラダカラ	房総以南		二枚貝	
16	キイロダカラ	房総以南		※フネガイ科	
17	クチムラサキダカラ	房総以南	44	ベニエガイ	房総以南
18	ハナマルユキ	房総以南	45	リュウキュウサルボウ	種子島以南
19	ヒメホシダカラ	紀伊以南		※シュモクアオリ科	
20	ホシダカラ	種子島以南	46	マクガイ	種子島以南
21	※フジツガイ科			※カゴガイ科	
22	ホラガイ	紀伊以南	47	カゴガイ	奄美以南
23	※スイショウガイ科			※シャコガイ科	
24	ムカシタモト	房総以南	48	シラナミ	種子島以南
25	マガキガイ	房総以南	49	ヒレジャコ	種子島以南
26	スイジガイ	紀伊以南	50	ヒメジャコ	種子島以南
27	クモガイ	紀伊以南		※ザルガイ科	
28	ラクダガイ	九州南部以南	51	リュウキュウザル	奄美以南
29	※アクキガイ科		52	カワラガイ	奄美以南
30	テツレイン	紀伊以南		※マルスダレガイ科	
31	シラクモガイ	九州南部以南	53	マルオミナエシ	紀伊以南
32	ガンゼキボウ	房総以南	54	※チドリマスオ科	
33	※オニコブシ科			イソハマグリ	房総以南
34	コオニコブシ	紀伊以南	55	※ニッコウガイ科	
35	※ヤツシロガイ科			モチヅキザラ	奄美以南
36	ウズラガイ	房総以南	56	※シオサザナミガイ科	
				リュウキュウマスオ	紀伊以南

第3表 貝類の呼称・捕獲法・調理方法表

科・種	北大島地区における呼称	住用村における呼称	棲息地	捕獲方法	調理方法	採れる時期	その他
ミミガイ科 マアナゴウ <i>Ovinotis ovins</i>	ヌズリィンニヤ ユリンニヤ モロゲンニヤ	トコブシ	波の荒い海、珊瑚礁に棲む (ニヤト)	満潮時に、リーフから出て来たところを捕獲	ゆでて食べる サシミ	3~6月	上等な貝である
ニシキウズ科 ベニシリダカ <i>Tectus maximus</i>	タッチヨンニヤ ※「立ち貝」の意		リーフ内	素手	ゆでて食べる	夏場	
リュウテン科 チョウセンサザエ <i>Turbo argyrostomum</i>	カンタニヤ	タマミナ	水深1m前後のやや深い地点。珊瑚礁の終わる地点	干潮時に岩の間から素手で捕獲	つぼやき・刺身	一年中	リーフに多く棲息している

科・種	北大島地区における呼称	住用村における呼称	棲息地	捕獲方法	調理方法	採れる時期	その他
リュウテン科 ヤコウガイ <i>Lunaria marmorata</i>	ヤッコウゲ ヤックゲ		比較的深い場所 (水深2m以上)	潜水して捕獲	身が多く、生で刺身にしたり、ゆでた後食べたりする	春～秋	殻を使用したい時は身に糸をつけて2～3日本の上につるしておく
タカラガイ科 ハチジョウダカラ ホシダカラなど <i>Peritoius mauritiana</i> <i>Cypraea tigris</i>	大型のものウミンニヤ (白) サデンニヤ (色付) 小型のものムックンニヤ	ウシ	リーフ内	素手	ゆでた後、後背部を打ち欠いて身を出す。打ち欠く時は2個の貝を用いて背部を打撃する	一年中	鍔として利用することもある
フジガイ科 ホラガイ <i>Charonia tritonis</i>	ブラ(ブランニヤ) ※ホラガイを吹く音に由来	ブラ	砂中	素手	ゆでて食べる 身は少々にが味があり、あまり好まれない	一年中	殻を使用することが多い
ヤツシロガイ科 スクミウズラ <i>Tonna cepa</i>	アブラソニヤ		リーフ内	素手	ゆでて食べる	比較的少ない	
アッキガイ科 シラクモガイ <i>Parpura armigera</i>	カブンニヤ ※トゲの多い貝(オニコブシ・ツノレイシ・ツレイン等)の総称		リーフ内	素手又はドライバー状のもので掘り起こす	ゆでて食べる	一年中	
イトマキボラ科 リュウキュウツノマタ <i>Latirus polygonus</i>	スンニヤ		リーフ内	素手	ゆでて食べる	夏に比較的多い	
イモガイ科 イモガイ科の貝	ブットウンニヤ	ブットン	浅瀬	素手	塩でゆでる	春～秋	あまり好んでは食べられない
イタボガキ科 カキ類	ガキ	ガキ					あまり食べない
シャコガイ科 シラナミ <i>Tridacna elongata</i>	ギブンニヤ ※シャコ貝類を総称している場合もある スワリンニヤ	スワリ ※「ス」は瀬や珊瑚礁を示す語	岩の底に付着	アッサリグイと呼ばれる鉄棒を貝の外唇部にさしこみ、こじる	刺身(身が柔らかい) ゆでると固くなるので煮て食べられることはない	一年中	
イソシジミ科 ヤエヤマスダレ <i>Katelysia hiantina</i>		ムギ	内海の淡水と海水の混じる場所				
イソシジミ科 マスオガイ <i>Psammotaea elongata</i>		カキミナ	内海の砂中	干潮時にドライバー状のものを貝の棲む穴に入れ、貝がそれを食べる間に周りから穴を掘って捕る	ゆでて食べる	春	

科・種	北大島地区における呼称	住用村における呼称	棲息地	捕獲方法	調理方法	採れる時期	その他
イソシジミ科 リュウキュウマスオ <i>Asaphis dichotoma</i>		クチボト			ゆでて食べる		
シジミガイ科 シレナシジミ <i>Geloina papua</i>			淡水と海水が混じる場所		ゆでて食べる		
ツタノハ科 オオベッコウガサ <i>Cellana testudinaria</i>	ナブンニヤ ※「ナベ蓋貝」の意 ユルソニヤ	コシナ ※「コ」はユル 即ち夜を示す	岩場	ドライバー状のものでとる	ゆでて食べる みそに入れて食べるこ ともある	春～秋	
スイショウガイ科 マガキガイ <i>Conomurex luchuanus</i>	ドビンニヤ		浅瀬の岩場	素手	ハリ状のもので身をとりだし、ゆでて食べる	春～夏	
スイショウガイ科 クモガイ <i>Lambis lambis</i> スイジガイ <i>Harpago oturagra</i> サソリガイ <i>Lambis orocata</i>	ウミンニヤ 又はマヤンニヤ ※「猫貝」の意 スイジガイのことを マヤンニヤと呼ぶこともある				煮た後、殻をわって身をとり出す。生では食べない	冬	突起が7本のものは縁起がよいとして家屋の軒下に下げて魔除けにする風習がある
小型の2枚貝	マラツ	ウムギ			汁物のだし		
フジツボ	チヂフガ ※「チヂ」は頂上、「フガ」は穴を意味する	チヂブッカ	岩場	ドライバー状のもので捕る	汁物のだし		あまり好まれない

※この表は、手広遺跡（概報）に報告したものに追加したものである。

## 第3節 貝類遺存体

千葉県立中央博物館 黒 住 耐 二

奄美大島の北部・笠利町東海岸に位置する用見崎（ようみさき）遺跡は、4世紀前後のいわゆる弥生時代後期に相当する兼久式土器を中心とする時代のものである。遺跡は太平洋に面した砂丘上に位置している。今回、この遺跡の第1文化層から発掘された貝類遺存体について検討することができたので、ここに報告したい。報告に先立ち、貴重な資料の検討の機会を与えて戴き、有益な御教示を戴いた笠利町立歴史民俗資料館の中山清美氏に御礼申し上げる。

### 1. サンプルの内容と最少推定個体数

今回対象としたのは、A-2グリッド（2×2m）の第Ⅱ層（第1文化層）から出土したものである。このサンプルは、現地でのピックアップ法による2.5袋分と5mmのフルイによって得られた1袋分からなっていた。

得られたサンプルは、貝類104種、甲殻類5種、棘皮動物2種、環形動物1種であった。貝類の場合、殻頂を有する個体を1個体とし、さらに殻口・軸唇等の個体を識別できる残存部位も1個体として、最少推定個体数とした。また二枚貝では、左右殻のうち多い方を最少推定個体数とした。ピックアップ法とフルイ法によって得られた最少推定個体数を表4に示した。

### 2. 非食料残滓の貝類

本遺跡から出土した貝類のうち、食料でなかったと考えられるものには、1) オカヤドカリ類によって遺跡に持ち込まれたもの、2) 水磨を受けた個体などの死殻、3) 殻皮が残存している現生個体の混入したもの、4) ヘビガイ類やカンザシゴガイ類などによりリュウキュウヒバリ等に付着した個体が離脱したもの等があった。このうち、1から3のカテゴリーに属する個体については、表4中に明記した。

表4 用見崎遺跡出土の貝類遺存体

	ピックアップ法	フルイ法	生息場所類系
軟体動物門 Mollusca			
腹足綱 Gastropoda			
ツタノハ科 Patellidae			
ツタノハ <i>Patella (Penepatella) flexuosa</i>	3	4	I·3·a
カサガイ類 Nacellidae			
オオベッコウカサガイ <i>Cellana testudinaria</i>	•	1	I·1·a

ヨメガカサガイ	<i>C. toreuma</i>	5	•	I · 1 · a
ユキノカサガイ科 Lottiidae				
リュウキュウアオガイ	<i>Patelloidea striata</i>	2	2	I · 1 · a
ニシキウズガイ科 Trochidae				
イシダタミガイ	<i>Monodonta (s.s.) confusa</i>	2A	6(2A)	I · 1 · b
ニシキウズガイ	<i>Trochus (s.s.) maculatus</i>	•	1	I · 2 · a
ムラサキウズガイ	<i>T. (s.s.) stellatus</i>		2	I · 3 · a
ギンタカハマガイ	<i>T. (Tectus) pyramis</i>	1	1	I · 4 · a
サラサバティラ	<i>T. (T. ) niloticus</i>	•	2	I · 3 · a
リュウテン科 Turbinidae				
コシダカサザエ	<i>Turbo (Marmorostoma) stenogyrum</i>	3(2スレ)	6(1スレ)	I · 2 · a
チョウセンサザエ	<i>T. (M. ) angystostomus</i> (operculum)	2(1スレ) 5	2(1スレ)	I · 3 · a
ヤコウガイ	<i>T. (Lunatica) marmoratus</i> (operculum)	7(1幼) 1	• •	I · 4 · a
オオウラウズガイ	<i>Astralium rhodostoma</i>	1	•	I · 2 · a
アマオブネ科 Neritidae				
キバアマガイ	<i>Nerita (Ritena) plicata</i>	2	4	I · 0 · a
フトシジアマガイ	<i>N. (R. ) costata</i>	1	1	I · 1 · a
ヒメイシダタミアマオブネ	<i>N. (R. ) tristis</i>		10	I · 1 · a
リュウキュウアマガイ	<i>N. (R. ) insculpta</i>		1A	I · 0 · a
アマオブネ	<i>N. (Thelyostila) albicilla</i> (operculum)	174(2スレ)	167(3A, 1ヤケ) 1	I · 1 · b
オオマルアマオブネ	<i>N. (T. ) chamaeleon</i>		1	I · 1 · a
ニシキアマオブネ	<i>N. (Amphinerita) polita</i> (operculum)	27(1A)	62(3A) 7	I · 1 · c
ムカデガイ科 Vermidae				
リュウキュウヘビガイ	<i>Serpulorbis varidus</i>		2(1スレ)	I · 2 · a
ヘビガイの一種	<i>S. sp.</i>	6	42	I · 1 · a
フタモチヘビガイ	<i>Dendropoma maximus</i>	2(1スレ)		I · 2 · a
タツノコヘビガイ ?	<i>Bivonia dragonella ?</i>	3(1スレ)	6	I · 1 · a
スズメガイ科 Hippopsidae				
カワチドリガイ	<i>Antisabia foliacea</i>		1	I · 2 · a
オニノツノガイ科 Cerithiidae				
ヒメトウガタカニモリガイ	<i>Rhinoclavis cedonulli</i>	1A	1スレ	I · 2 · a
コオニノツノガイ	<i>Cerithium (Contumax) columnna</i>		1	I · 2 · c
メオニノツノガイ	<i>C. (C. ) echinatum</i>	•	1スレ	I · 4 · c
オニノツノガイ	<i>C. (s.s.) nodulosum</i>	6(1A)	•	I · 2 · c
ゴマフカニモリガイ	<i>C. (Semivertagaus) alveolus</i>		3(1スレ)	I · 2 · a
スイショウガイ科 Strombidae				
ムカシタモトガイ	<i>Strombus (Conomurex) mutabilis</i>	2(1スレ)		I · 2 · a
マガキガイ	<i>S. (C. ) luchuanus</i>	35	10(1ヤケ)	I · 2 · c
クモガイ	<i>Lambis lambis</i>	3(1死)	•	I · 2 · c
ラクダガイ	<i>L. truncata</i>		•	I · 4 · c
スイシガイ	<i>Harpago chiragra</i>	1		I · 2 · c
タカラガイ科 Cypraeidae				
ハナビラダカラ	<i>Cypraea (Monetaria) annulus</i>	11	15	I · 1 · a
キイロダカラガイ	<i>C. (M. ) moneta</i>	4	4	I · 1 · c
ハマナルユキ	<i>C. (Ravitrona) caputserpentis</i>	24	32	I · 3 · a
ヒメホンダカラ	<i>C. (Lyncina) lynx</i>		1	I · 2 · a
ヤクシマダカラ	<i>C. (Arabica) arabica</i>	5	4	I · 2 · a
ハチジョウダカラ	<i>C. (Mauritia) mauritiana</i>	1	•	I · 1 · a

ホシダカラガイ	<i>C.</i> (s.s.) <i>tigris</i>	1	I · 2 · c
アヤボラ科 Ranulidae			
ミツカドボラ	<i>Cymatium (Cymatriton) nicobaricum</i>	5(1ヤケ)	• I · 2 · a
ホラガイ	<i>Charonia tritonis</i>	•	I · 4 · a
オキニシ科 Bursidae			
オキニシ	<i>Bursa bufoonis dunkeri</i>	15(1A)	3 I · 3 · a
イワカワウネボラ	<i>Colubrellina granularis</i>	1	I · 2 · a
ヤツシロガイ科 Tonnidae			
スクミウズラガイ	<i>Tonna cepa</i>	1	• I · 4 · c
ウズラガイ	<i>T. perdix</i>	2	I · 2 · c
アッキガイ科 Muricidae			
ガンゼキボラ	<i>Chicoreus (Tripex) brunneus</i>	2	• I · 2 · a
ツノレイシガイ	<i>Mancinella tuberosa</i>	40(3A, 3ヤケ)	10 I · 3 · a
ツノテツレイシ	<i>M. hippocastanum</i>	2	I · 1 · a
コイボテツレイシ	<i>M. intermedia</i>	1	• I · 3 · a
シラクモガイ	<i>Thais (Stramonita) armigera</i>	14(1A)	4 I · 3 · a
キマダライガレイシ	<i>Drupa (s.s.) ricinus</i>	1	• I · 3 · a
シロイガレイシ	<i>D. (s.s.) albolabris</i>	1	I · 3 · a
ムラサキイガレイシ	<i>D. (s.s.) morum</i>	4	6 I · 3 · a
アカイガレイシ	<i>D. (Ricinella) rubusidaeus</i>	3	1 I · 3 · a
レイシダマシ	<i>Morula (s.s.) granulata</i>	2	I · 1 · a
ニッポンレイシダマシ	<i>M. (s.s.) sp.</i>	1	I · 2 · a
コゲレイシダマシ	<i>Cronia (Muricodrupa) fusca</i>	1	I · 1 · a
ハナワレイシ	<i>Nassa serta</i>	1	• I · 3 · a
ホソスジテツボラ	<i>Purpura persica</i>	•	1 I · 1 · a
エゾバイ科 Buccinidae			
シマベッコウバイ	<i>Japeuthria cingulata</i>	2	II · 1 · b
オリイレヨフバイ科 Nassaridae			
ヨフバイモドキ	<i>Telasco reeveana</i>	1	II · 2 · c
イトマキボラ科 Fasciolariidæ			
キイロツノマタガイモドキ	<i>Peristernia sulcata luchuana</i>	1A	I · 2 · a
リュウキュウツノマタガイ	<i>Latirus polygonus</i>	•	I · 2 · a
イトマキボラ	<i>Pleuroploca trapezium</i>	2	I · 2 · c
オニコブシガイ科 Vasidae			
コオニコブシガイ	<i>Vasum turbinella</i>	4	6 I · 2 · a
フデガイ科 Mitridae			
ニシキノキバフデガイ	<i>Mitra stictica</i>	3	• I · 3 · c
マクラガイ科 Olividae			
サツマビナガイ	<i>Oliva annulata</i>	1	1 I · 2 · a
イモガイ科 Conidae			
マライモガイ	<i>Conus (Virroconus) ebraeus</i>	1	I · 1 · a
サヤガタイモガイ	<i>C. (V. ) fulgetrum</i>	2	3 I · 1 · a
キヌカツギモガイ	<i>C. (Virgiconus) flavidus</i>	4	5 I · 2 · a
イボシマモガイ	<i>C. (V. ) lividus</i>	2	4 I · 2 · a
アラレイモガイ	<i>C. (Chelyconus) catus</i>	1	2 I · 3 · a
ヤナギシボリイモガイ	<i>C. (Rhizoconus) miles</i>	2	2 I · 2 · c
ミカドミナシガイ	<i>C. (Rhombus) imperialis</i>	1	I · 2 · c
アジロイモガイ	<i>C. (Darioconus) pennaceus</i>	1	2 I · 2 · c
ニシキミナシガイ	<i>C. (Dendroconus) striatus</i>		1 I · 2 · c
アンボンクロザメガイ	<i>C. (Lithoconus) litteratus</i>	1	I · 2 · c
小型イモガイ	<i>C. sp. (small size; Viroconus ?)</i>		1スレ I
中型イモガイ	<i>C. spp. (middle size; Virgiconus ?)</i>	7	3 I

ナツメガイ科 Bullidae					
コナツメガイ	<i>Bulla orientalis</i>	1		I · 2 · c	
カラマツガイ科 Siphonaridae					
コウダカカラマツガイ	<i>Siphonaria laciniosa</i>	28	79	I · 1 · a	
(淡水・陸産貝類)					
トウガタカワニナ科 Thiaridae					
ヌノメカワニナ	<i>Melanoides tuberculata</i>	1		IV · 5	
ヤマタニシ科 Cyclophoridae					
オオシマヤマタニシ	<i>Cyclophorus hirasei oshimana</i>	2	8	V · 8	
ナンバンマイマイ科 Camaenidae					
オオシママイマイ	<i>Satsuma</i> (s.s.) <i>oshimae</i>	1(色)	1	V · 8	
オナジマイマイ科 Bradybaenidae					
タメトモマイマイ	<i>Phaeohelix phaeogramma</i>	1	12	V · 9	
オキナワウスカワマイマイ	<i>Acusta d. despacta</i>	2	15	V · 9	
二枚貝綱 Bivalvia					
フネガイ科 Arcidae					
エガイ	<i>Barbatia</i> ( <i>Abarbatia</i> ) <i>lima</i>		1/0	I · 2 · a	
ベニエガイ	<i>B.</i> ( <i>Ustularaca</i> ) <i>bicolorata</i>	1/0		I · 2 · a	
イガイ科 Mytilidae					
リュウキュウヒバリガイ	<i>Modiolus auriculatus</i>	61/56	174/184	I · 1 · a	
ヒバリガイモドキ	<i>Hormomya mutabilis</i>		• ヤケ	I · 1 · a	
ウグイスガイ科 Pteriidae					
ミドリアオリガイ	<i>Pinctada panasesae</i>		0/1	I · 1 · a	
クロチョウガイ	<i>P.</i> <i>margaritifera</i>	•		I · 4 · a	
ショモクアオリガイ科 Isogmomonidae					
シロアオリガイ	<i>Isognomon legumen</i>		2(1ヤケ)/0	I · 2 · a	
カシアアオリガイの一種	<i>I.</i> sp.	0/1		I · 1 · a	
キクザルガイ科 Chamidae					
カネツケザルガイ	<i>Chama iostoma</i>		1(スレ)/0	I · 1 · a	
キクザルガイ属の一種	<i>C.</i> sp.		1(孔)/0	I · 2 · a	
フナガタガイ科 Trapeziidae					
フナガタガイ	<i>Trapezium bicarinatum</i>	1/0		I · 2 · c	
シャコガイ科 Tridacnidae					
シラナミガイ	<i>Tridacna</i> ( <i>Flodacna</i> ) <i>maxima</i>	6/4(・ヤケ)	1/1	I · 2 · a	
ヒメジャコガイ	<i>T.</i> ( <i>Chametrachea</i> ) <i>crocea</i>	0/1		I · 2 · a	
シオサザナミガイ科 Psammobiidae					
リュウキュウマスマオガイ	<i>Asaphis violascens</i>	2/0	0/1	II · 1 · c	
マルスダレガイ科 Veneridae					
アラヌメガイ	<i>Pteriglypta</i> (s.s.) <i>reticulata</i>	0/1	0/1	I · 3 · c	
多板綱 Polyplacophora					
ヒザラガイ科 Chitonidae					
ヒザラガイの一種	<i>Chitonidae</i> sp.			I · 1 · a	
節足動物門 Arthropoda					
蔓脚綱 Cirripedia					
ミョウガガイ科 Scalpellidae					
カメノテ	<i>Pollicipes mitella</i>	7	8	I · 1 · a	
エボシガイ科 Lepadidae					
エボシガイ	<i>Lepas anatifera</i>		3	VI · 11	
フジツボ科 Balanidae					
ミナミクロフジツボ	<i>Tetraclita squamosa squamosa</i>	2	3	I · 1 · a	
タイワンクロフジツボ	<i>T.</i> <i>squamosa formosa</i>	6	3	I · 1 · a	

軟甲綱 Malacostraca			
ワタリガニ科 Portunidae			
ノコギリガザミ	<i>Scylla serrata</i>	1	• III · 0 · a
棘皮動物門 Echinodermata			
ウニ綱 Echinoidea			
ラッパウニ科 Toxopneustidae			
シラヒゲウニ	<i>Tripneustes gratilla</i>	+	II · 2 · c
ナガウニ科 Echinometridae			
ナガウニ	<i>Echinometra mathaei</i>	+	I · 2 · a
環形動物門 Annelida			
多毛綱 Polychaeta			
カンザシゴカイ科 Serpulidae			
カンザシゴカイの一種	Serpulidae sp.	3	I · 1 · a

二枚貝は左殻／右殻で示した。

表中の略号は以下のとおりである。A：オカヤドカリ類の使用殻を有する個体、•：殻頂部を持たない破片のみの出土、スレ：水摩を受けた死殻、ヤケ：焼けている個体、幼：幼貝、色：殻皮の残っている混入個体、孔：多孔質になった死殻、死：殻口内に付着物のある死殻。

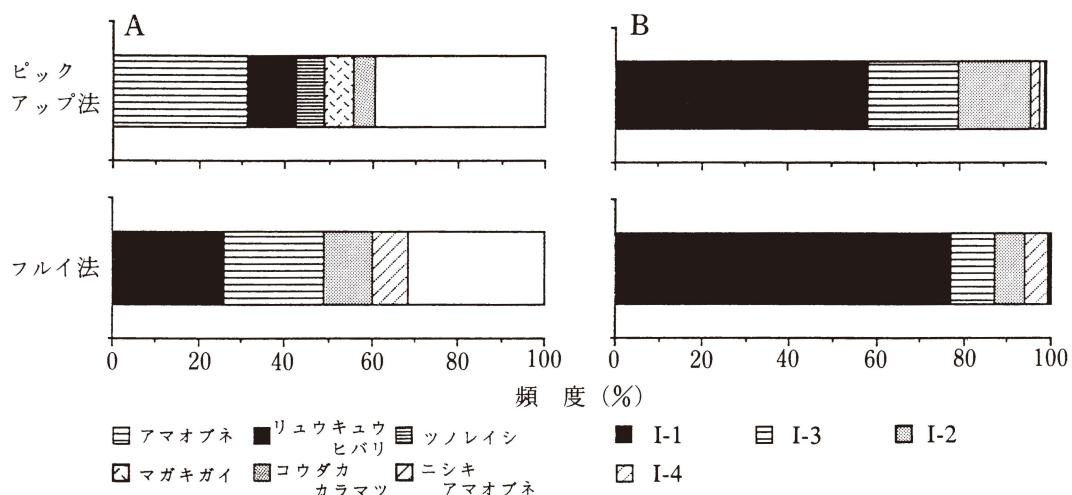
生息場所は、以下の類系によって表した。

I : 外洋・サンゴ礁域	0 : 潮間帯上部 (I ではノッチ、III ではマングローブ)	a : 岩盤
II : 内湾・転石域	1 : 潮間帯中・下部	b : 転石
III : 河口干潟・マングローブ域	2 : 潮下帶上縁部 (イノー内)	c : 泥・砂・礫底
	3 : 干瀬	
	4 : 礁斜面	
IV : 淡水域	5 : 止水	
	6 : 流水	
V : 陸域	7 : 林内	
	8 : 林内・林縁部	
	9 : 林縁部	
	10 : 海浜部	
VI : その他	11 : 打ち上げ	
	12 : 化石	

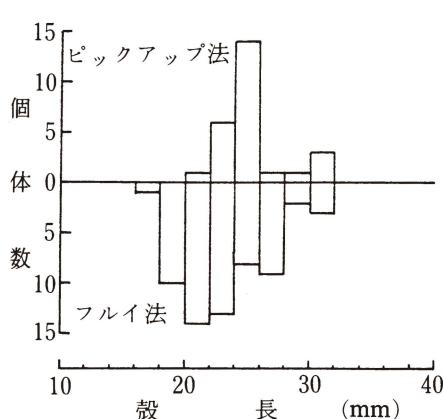
オカヤドカリ類の使用殻は、ピックアップ・フライ両法のサンプルで9種・20個体であり、その多くが中・小型種であった。水磨等を受けている死殻には、コシダカサザエ・メオニノツノガイ等の種が認められた。小型種で、肉量が少なく食用ではなくオカヤドカリ類の使用殻と考えられた種は、表中に示した種のほかにゴマフカニモリ・シマベッコウバイ・ヨフバイモドキ・キイロツノマタモドキである。ヘビガイの一種、タツノコヘビガイ・カワチドリは他の貝に付着して遺跡に持ち込まれたと考えられ、出土した全ての個体を非食料とした。これらの種を除いた残りの種を食料残滓貝類として取り扱った。

### 3. 生息場所と関連させた食料残滓貝類の特徴

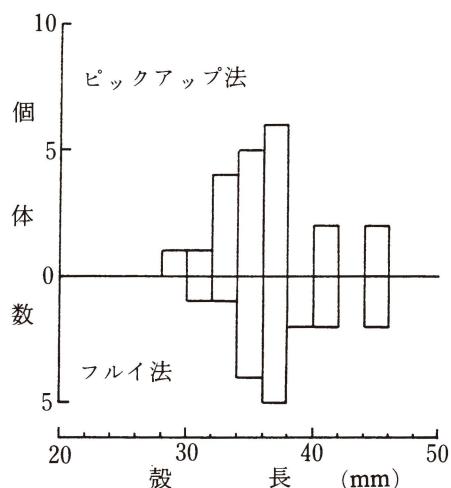
本遺跡の主体貝類を図A-Aに示した。ピックアップ法による結果では、アマオブネが全体の約1/3と最も多く、リュウキュウヒバリ・ツノレイシが次いで多かった。フルイ法では、リュウキュウヒバリが全体の1/4を占め、続いてアマオブネもほぼ同様の割合を持っていた。コウダカカラマツ・ニシキアマオブネの割合も高かった。種ではなくグループとしては、ピックアップ法でレイシ類(11%)・タカラガイ類(約8%)等も多かった。フルイ法でも、タカラガイ類の割合は前者とほぼ同様であったが(約8%)、レイシ類の割合は約3%と低くなっていた。フルイ法では、リュウキュウヒバリ・コウダカカラマツ・ニシキアマオブネ等の2~4cm程度の小型種の割合が増加していた。一方、中・大型



図A 用見崎遺跡より出土した食料残滓貝類の組成  
A:種組成、B:生息場所類系組成



図C コウダカカラマツガイの殻長組成



図B リュウキュウヒバリガイの殻長組成

種の出土個体数では、2つの方法に大きな変化はみられなかった。フルイ法は、小型種の組成や出土個体数など、より正確に遺存体の内容を反映できるものと考えられる。

この両方法の相違は、出土貝類のサイズ組成にも反映している。図B、Cには、主体貝であるリュウキュウヒバリとコウダカカラマツの殻長組成を示した。リュウキュウヒバリ（図B）では、両方法とも34～38mmの個体が多く、両者に大きな相違はなかった。一方コウダカカラマツ（図C）の殻長は、ピックアップ法で24～26mmを、フルイ法で20～22mmを中心とした組成を示していた。つまり、フルイ法のサンプルによると明らかに小型の個体が多く得られていた。リュウキュウヒバリでは、貝殻が薄く、堆積中の著しい破損のために、両方法によるサイズの相違を相殺してしまった可能性が高い。

貝類の生息場所類系では（図A～B）、出土個体のほとんど全てが外洋－サンゴ礁域（I）に生息する種であった。主体貝のリュウキュウヒバリ・アマオブネ・コウダカカラマツ等の多いことの反映として、潮間帯中・下部（I-1）の割合がピックアップ法で60%近くを占めていた。フルイ法では、リュウキュウヒバリ等の増加を反映して、この場所の割合が80%近くとなっていた。本遺跡ではコウダカカラマツの他にも、ヨメガカサ等のカサガイ類も比較的多かった。主体貝であるリュウキュウヒバリとコウダカカラマツの殻長組成を示したが（図B、C）、いずれも現在得られる個体の約2倍の大きさを持っていた。このことから、用見崎遺跡の人々は、選択的に大型の個体を採集し、サイズの小型化を生じさせるほどの捕獲圧をかけなかったものと考えられる。潮間帯中・下部の種類数は、潮間帶上部のキバアマガイを含めて、25種と比較的多かった。

ついで、干瀬（I-3：リーフ）の種の出土数はピックアップ法で20%程度であった。干瀬では、ツノレイシ等のレイシ類やハナマルユキ・オキニシが多く、チョウセンザザエは少なかった。この類系の種数は17種であり、レイシ類が多かった。また、この場所に生息するツタノハは殻長31mm以下の個体のみ確認された。本種に近似した大型のオオツタノハ<sup>(注1, 2, 3, 4, 5)</sup>は、奄美・沖縄各地の遺跡から貝輪等の製品として出土している。しかしながらオオツタノハの未製品あるいは食料残滓の出土は報告されていない。用見崎遺跡からも本種が出土しなかったことから、笠利付近でもオオツタノハが得られなかつた可能性が高い。

イノー内（I-2）の種の出土数は20%にも満たず、この類系の主体貝としてはマガキガイが多く出土していた。この場所の種数は36種と今回の結果の中では最も多かった。この場所に生息するシャコガイ類は、サンゴ礁の食用貝類として出土量の多いグループである。沖縄諸島におけるシャコガイ類のサイズは時代を経るに従って小型化する傾向が認められている。<sup>(注6)</sup>僅かに出土した本遺跡におけるシャコガイ類のサイズは、52～105mmの範囲にあり、中型の個体であった。出土量とサイズから、この時期におけるシャコガイ類に対する捕獲圧はそれほど大きなものではなかった可能性が高いと思われる。

礁斜面（I-4）では、ヤコウガイが比較的多く、種類は6種と少なかった。

#### 4. 他の遺跡との比較

##### (1) 破損率

本遺跡の出土貝類の特徴として、肉を取り出すために多くの貝殻を割っていることが挙げられる。表5に、主な巻貝類の破損している個体の割合（破損率）を示した。表5に示した巻貝類は、貝殻が厚い典型的なサンゴ礁性の貝類である。殻の薄いリュウキュウヒバリなどでも破損個体が著しく多かったが、これは食用のための破損であるのか堆積中の破損であるのか識別できなかったので、今回の対象から除いた。破損率は、タカラガイ類で最も高く、イモガイ類・レイシ類でも60%以上の値をとっている。アマオブネ類全体では約10%程度であるが、種によって異なった破損率を示していた。アマオブネでは2%以下であったのに対し、ニシキアマオブネでは30~70%と著しく高率であった。この両種の差異から、アマオブネは肉を直接食用とせず、スープ等に利用したと考えられ、ニシキアマオブネでは貝殻を割っての肉の利用が想定される。またフルイ法によって、僅かではあるが、両種のフタが出土している。沖縄県本部町にある沖縄貝塚時代後期の具志堅貝塚では、出土したアマオブネ類のオカヤドカリ使用痕率が約50%にも達している。<sup>(注7)</sup>そのため、このグループは食用ではなく、単なるオカヤドカリ類の遺跡への持ち込みの可能性もあった。今回のフタの出土は、このグループの食用の決定的な証拠となった。

前述した具志堅貝塚の破損率も表5に示したが、用見崎遺跡よりはるかに低い値を示している。具志堅貝塚におけるタカラガイ類・レイシ類・イモガイ類の破損率は、10~30%程度であるが、用見崎遺跡ではいずれのグループでも破損率は60%以上の高率である。

表5 用見崎遺跡出土貝類の破損率および沖縄・具志堅貝塚との比較

	用見崎遺跡		具志堅貝塚 <sup>(注7)</sup> ピックアップ法
	ピックアップ法	フルイ法	
アマオブネ	0.0(172)	1.8(164)	
ニシキアマオブネ	73.1( 26)	33.9( 59)	
アマオブネ類	10.0(201)	12.1(239)	20.7(29)
タカラガイ類	91.3( 46)	94.7( 57)	33.3(21)
ツノレイシ	91.9( 37)	90.0( 10)	
レイシ類	79.7( 64)	79.3( 29)	10.0(10)
イモガイ類	63.2( 19)	91.3( 23)	16.7(24)

( ) 内は調査標本数

のことから両遺跡における貝殻を割る文化に大きな相違が存在するものと考えられる。

## (2) 他遺跡との種組成の比較

本遺跡出土貝類の種組成は、これまでに報告のある奄美大島・徳之島の遺跡と類似している。つまり、イノー内に生息する種が比較的少なく、潮間帯中・下部の種、特にコウダカカラマツ等の笠貝類が多いという傾向が認められる。しかし現時点において、奄美諸島では層序ごとの出土量を検討した報告は少なく、詳細な比較・検討は今後の研究を待たねばならない。ここでは量的組成が報告されている遺跡と簡単な比較を行った。

まず時代的には異なるが、笠利町のケジ遺跡や宇宿貝塚、徳之島の犬田布貝塚ではアマオブネ類が多く出土しており、用見崎遺跡と類似している。ただ、これらの遺跡では、陸産貝類の出土が多く、本遺跡とは異なっている。また、兼久式の時代の遺跡である徳之島の面縄第1貝塚<sup>(注1, 10)</sup>とは、リュウキュウヒバリ（報告ではヒバリガイとなっているが琉球列島にはヒバリガイは分布せず、本種に同定される）の多量出土という傾向が類似している。同時期の面縄第3貝塚<sup>(注10)</sup>では、シャコガイ・タカラガイ等のイノー内の種が主体となり、組成が異なっていることが報告されている。このような隣接した同時期の遺跡で食料残滓貝類の組成が異なる現象は、周辺環境の相違とは考えられず、「集団の貝類採集テリトリーの違い」に起因する可能性が高い。今後の検討課題であろう。

沖縄の砂丘上の遺跡に多いシャコガイ類・マガキガイ等は、本遺跡では比較的少なかった。これは、イノーの発達しない奄美大島のサンゴ礁地形に起因するものと考えられる。時代は異なるが沖縄島北端部に位置し、イノーの発達の悪い砂丘上に立地する沖縄貝塚時代後期の宇佐浜B貝塚<sup>(注4)</sup>と比較すると、その相違は明瞭となる。この貝塚でもヤコウガイが多量に得られていることなど、本遺跡との類似点も認められる。しかし、宇佐浜B貝塚では、チョウセンサザエやマガキガイ・サラサバティラが主体貝となり、外洋ーサンゴ礁域のイノー内・干瀬・礁斜面の種の割合が、全体の3/4を占めている。宇佐浜B貝塚と用見崎遺跡は地形的に類似しながらも、採集された貝類の組成に大きな相違が認められた。その要因を検討することも今後必要となろう。

沖縄島の遺跡と比較して、本遺跡に特徴的なものに甲殻類のクロフジツボ類やカメノテがあり、これらの種の大型の個体を選択して採集していた。これらは、奄美大島・徳之島の遺跡から出土する割合が高い。沖縄島ではカメノテはほとんど生息しないが、クロフジツボ類は比較的多く生息しているにもかかわらず、遺跡からの出土量は少ない。このことは、沖縄と奄美でフジツボ類に対しての嗜好の相違が存在したことを見ているのかも知れない。

## 5. 遺跡周辺環境の推定

今回のサンプル中には、4種の陸産貝類が認められた。筆者の定性的な観察によると、

これらの種は林縁部に生息している種である。また、フリイ調査の貝殻中の約5ccの土壌から、林縁に生息するホソオカチャウジガイ *Allopeas pyrgula* と林内から林縁部にすむオオシマタワラガイ *Sinnoennnea iwakawa oshimaae* が各1個体得られた。一方、林内や海浜部にのみ生息する種は確認されなかった。これらの出土した陸産貝類の組成から、遺跡は海岸砂丘に立地しているものの、その後背地には非海岸性の二次林が存在していたものと考えられる。

(注1) 国分直一・他「奄美大島の先史時代」『奄美－自然と文化』日本学術振興会  
1959年

(注2) 河口貞徳(編)『サウチ遺跡』笠利町教育委員会 1978年

(注3) 吉永正史・宮田栄二(編)『犬田布貝塚』伊仙町教育委員会 1984年

(注4) 岸本義彦(編)『宇佐浜遺跡発掘調査報告書』沖縄県教育委員会 1989年

(注5) 盛本勲(編)『清水貝塚発掘調査報告書』具志川村教育委員会 1989年

(注6) 大城慧(編)『伊原遺跡』沖縄県教育委員会 1986年

(注7) 黒住耐二「オカヤドカリ類と宿貝との関係」『あまん』沖縄県教育委員会  
1987年

(注8) 白木原和美・他『ケジ遺跡・コビロ遺跡・辺留窪遺跡』笠利町教育委員会  
1983年

(注9) 河口貞徳(編)『宇宿貝塚』笠利町教育委員会 1979年

(注10) 牛ノ浜修(編)『面縄貝塚群』伊仙町教育委員会 1985年

(注11) 岸本義彦(編)『野国－野国貝塚群B地点発掘調査報告書』沖縄県教育委員会  
1984年

## 第5章 発掘調査の成果

### 第1節 発掘調査の成果と今後の問題

今回の発掘調査は企業側が文化財保護と今後の活用について理解を示され、企業側の立場として文化財の保存活用が出来ないものかという新しい視点もある。行政が行う文化財の活用とちがい、開発する側が文化財を生かした活用ということになろう。これは今後県下はもちろん全国的にも注目される事例になろう。本調査を行い、企業側も行政側も納得のいく活用がなされることを祈る。

今回の発掘調査では、遺跡の広がりが大きくななく小規模のまとまりであった。特に遺跡の中心部15m×10m程度の範囲にまとまる。貝の分布から推定される。貝層は同一貝、または同一の貝だまり、貝の大きなブロックに分けて把握出来る。

貝が廃棄された小さな状況を「貝だまり」と表現し、貝だまりが集中している箇所を「貝ブロック」と表現して貝の分布状況を分けてみた。貝層は遺跡全体から出土するが、貝だまりからなる貝ブロックは大きく3つに分けられる（第17図）。第1貝ブロックは大型夜光貝を多量に含んでいる。夜光貝は5個前後の貝だまりである。また加工（主として貝匙）される材料として使われた夜光貝破片も多量に含まれる。夜光貝の身は食された後、貝は加工品として使用されている。その他にホソスジヒバリガイ、アマオブネ等の小型貝類の貝だまりも含まれている。

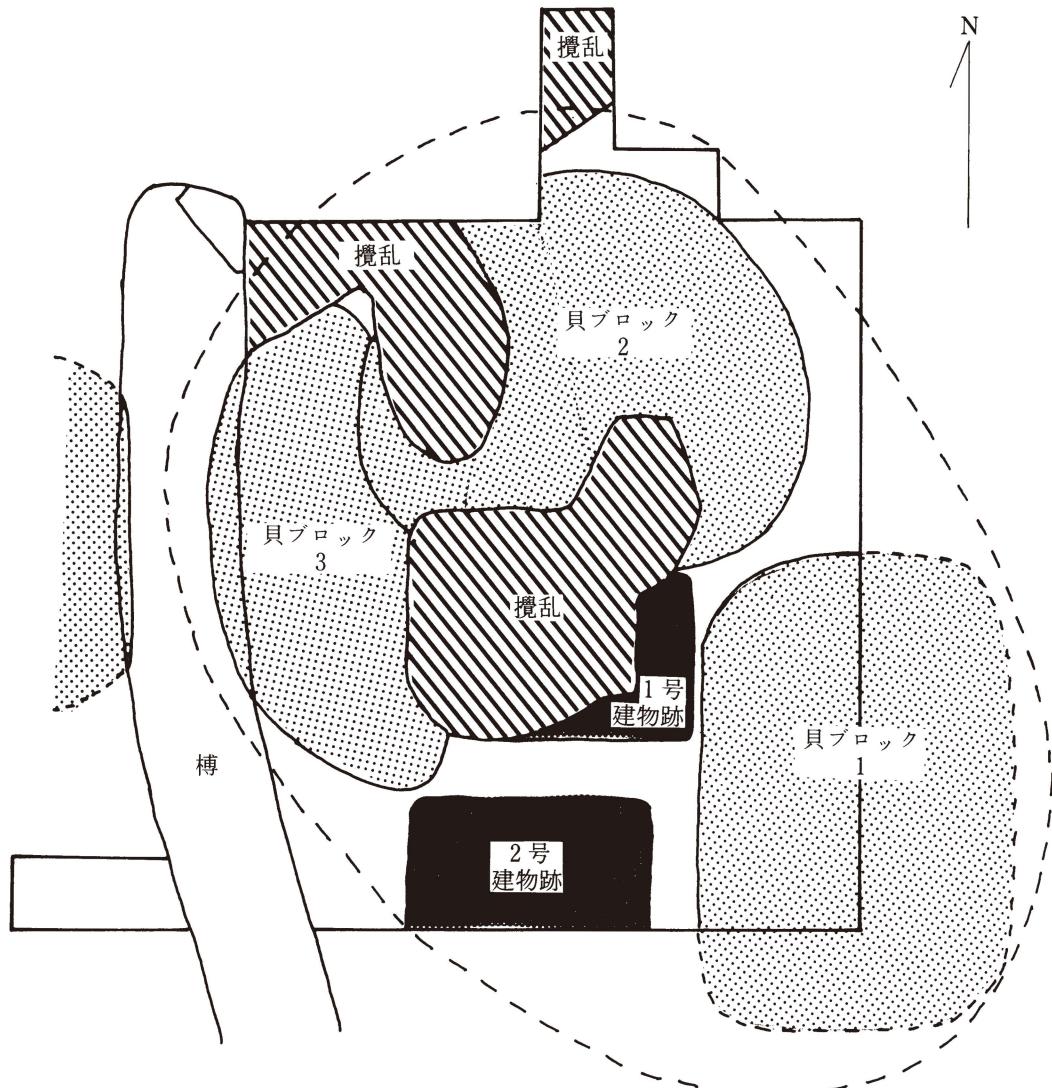
第2貝ブロックはホソスジヒバリガイ、アマオブネ等の小型貝類を主体とする。土器は少なく小片であった。貝玉、貝輪が出土したブロックでもある。

第3貝ブロックは2と同様にホソスジヒバリガイ、アマオブネ等の小型貝を主体とする。シャコ貝やスイジ貝、サラサバティラなどの大型の貝も含まれる土器片も大型破片もあり、貝符（貝札）もこのブロックからの出土である。

貝の廃棄の状況から第2ブロックと第3ブロックが重複しており、その状況から第2ブロックが新しいと思われる。第1ブロックと第3ブロックは接合する同一個体の土器も含んでおり、同一時期に形成されたと思われる。遺跡が小規模であり、貝の量や住居跡などから判断して数名の小集団で2家族ぐらいの短期間の遺跡形成と思われる。奄美の遺跡については季節的な漁撈採集活動も指摘されており、小集団によるベースキャンプ的なものと思われる代表的な遺跡と言えよう。

夜光貝を多量に出土していることと、夜光貝の背殻部分を割っており、夜光貝製品をつくる材料として持ち出されたと思われる。夜光貝製のスプーンなど夜光貝製の製品が1点も出土しておらず、本遺跡は夜光貝を採集し、加工にする材料として営まれた遺跡と思われる。

出土土器に関しては兼久式土器であり、兼久式土器以外の土器の混入は認められなかっ



第17図 概略図

た。兼久式土器の中でもこれまで代表的な形や文様をしたものでなく、かなり変化した兼久式土器と言えよう。遺跡が短期間と思われることから、これらの土器も同一時期でセットとしてとらえることが出来よう。貝製品もシャコ貝と思われる貝製品や広田上層タイプの貝符（貝札）も出土しており、今後沖縄のくびれ平底土器やアカジャニガ式土器などまた清水貝塚出土の貝符、広田上層の貝符の時期的なものとも比較する必要があろう。木下尚子氏は本遺跡出土の貝等について「広田上層タイプのものよりは新しい感じがする」とのアドバイスを頂いたが、このことについては氏が発表されると思う。パリノサーヴェイC14年代測定結果はAD150であった。本遺跡の年代については今後兼久式土器がもっ

と形態的に分類され、他の共伴遺物の出土に伴い明らかにされていくであろう。C14測定よりもやや新しくなると思われるが、貝符との関連から4世紀前後と思われる。遺跡の形成期間が短期間であるとしたのに対して、時期的なものについては3世紀後半から5世紀と幅を持たせた。このことについては南島において一番空白とされる時期であり、今後の編年作業上重要であるため、本遺跡は新しい資料を提供したと言える。今後マツノト遺跡出土の兼久式土器や沖縄、九州との比較も行いながらの編年が注目されよう。

小規模遺跡ではあったが本遺跡はかなりの成果があった。残っている遺構と西側の調査も行い、水田との関連もつかめられそうな遺跡であるため今後とも企業側と充分な話し合いを行い、本遺跡の保存活用がなされるようにして頂きたい。

## 第2節 マツノト遺跡・湊城一の曲輪・見崎遺跡の<sup>14</sup>C年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

### 1. 試料

試料は、マツノト遺跡から出土した炭化物3点、湊城遺跡から出土した炭化物1点、見崎遺跡から出土した貝片1点（合計5点）である。試料の詳細は、結果と共に表6に示した。

### 2. 測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。

### 3. 結果

結果は、表6に示した。

表6 <sup>14</sup>C年代測定結果

遺跡名	出土位置	質	Code No.	年代（1950年よりの年数）
マツノト	2区上層	炭化物	GaK-17225	2000±80y.B.P. (50 B.C.)
	14区上層	炭化物	GaK-17226	1560±80y.B.P. (A.D. 390)
	9区下層	炭化物	GaK-17227	1070±120y.B.P. (A.D. 880)
湊城	第1号建物跡柱穴第2号内	炭化物	GaK-17228	Modern $\delta^{14}\text{C} = 7.22 \pm .99\%$
見崎	遺構（住居跡）内	貝（マガキ）	GaK-17229	1800±80y.B.P. (A.D. 150)

なお年代値の算出には<sup>14</sup>Cの半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また、付記した誤差は $\beta$ 線の計数値の標準偏差 $\sigma$ に基づいて算出した年数で、標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代です。また試料の $\beta$ 線計数率と自然計数率の差が $2\sigma$ 以下のときは、 $3\sigma$ に相当する年代を下限の年代値（B.P.）として表示しております。また試料の $\beta$ 線計数率と現在の標準炭素（MODERN STANDARD CARBON）についての計数率との差が $2\sigma$ 以下のときには、MODERNと表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$ を付記しております。

マツノト遺跡の3試料では、上層の2試料の測定値が下層試料の測定値より古いものとなつた。この原因については現在のところ不明である。なお、出土遺物等より上層が7～8世紀代、下層が弥生時代後期とされている。

湊城一の曲輪第1号建物跡は13世紀代のものとされているが、柱穴内から出土した炭化物の測定値は、Modernであった。試料採取地点付近では、遺構直上に攪乱がみられたとのことであり、攪乱に伴い新しい炭化物が柱穴内に混入した可能性もある。

見崎遺跡住居跡出土の貝の測定値は、弥生時代後期頃に相当するものであった。これは、同住居跡より出土した土器などの編年観と調和する。



# 図 版





用の海岸



見崎遺跡山手より



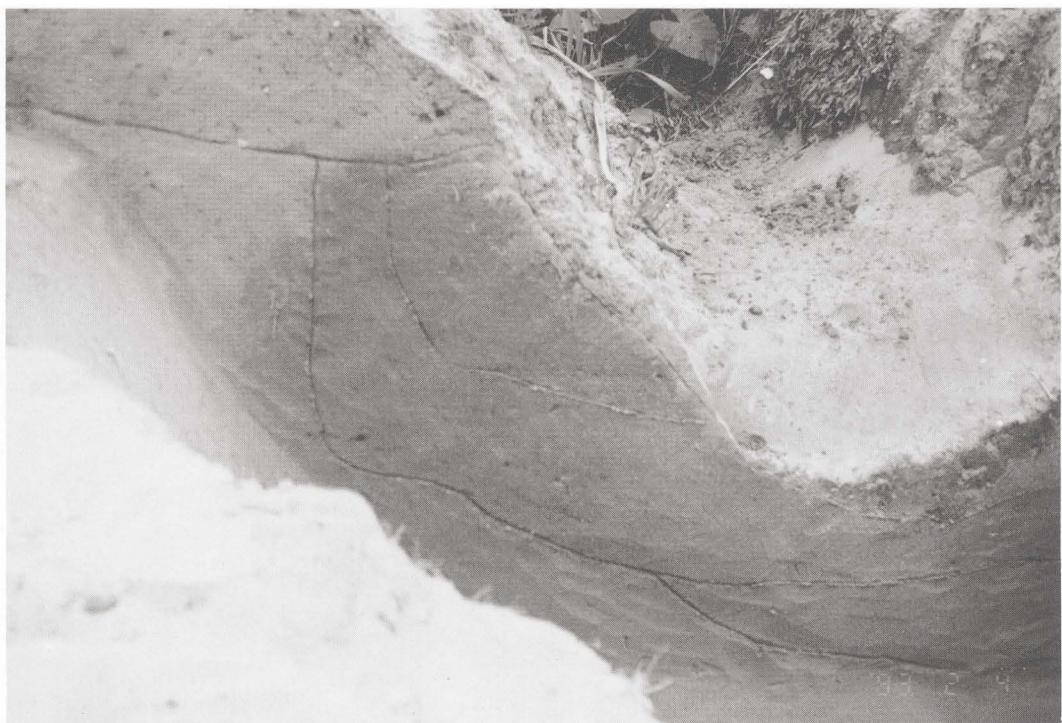
遺跡近影



溝狀遺構



溝状遺構



遺構断面



遺物出土状況 北側より



遺物出土状況 東側より



夜光貝列状の出土状況



貝符（貝札）出土状況



土器出土狀況



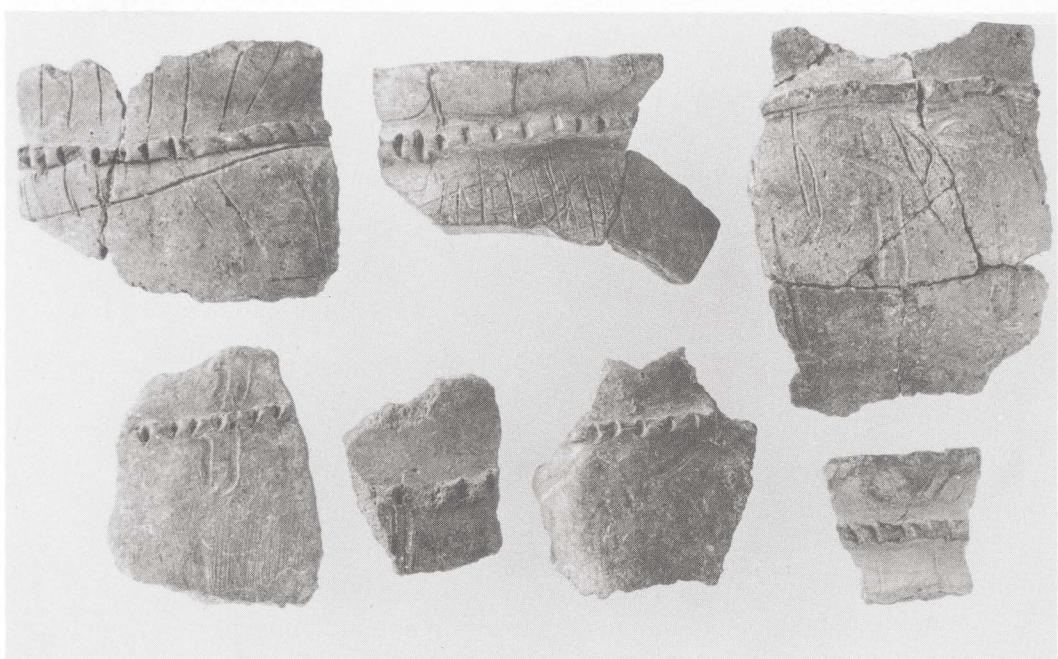
貝・土器出土狀況



マガキガイだまり



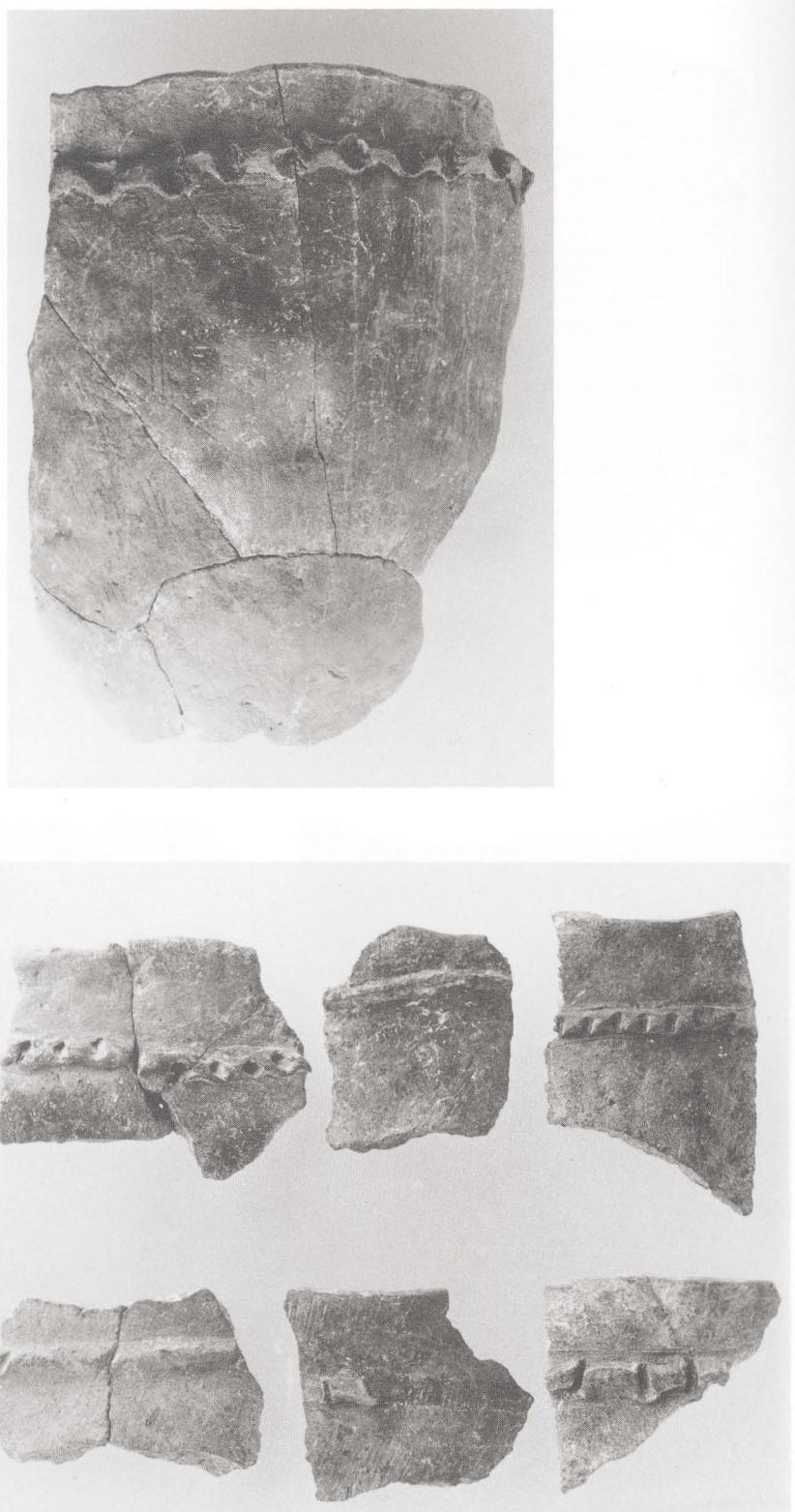
発掘スナップ



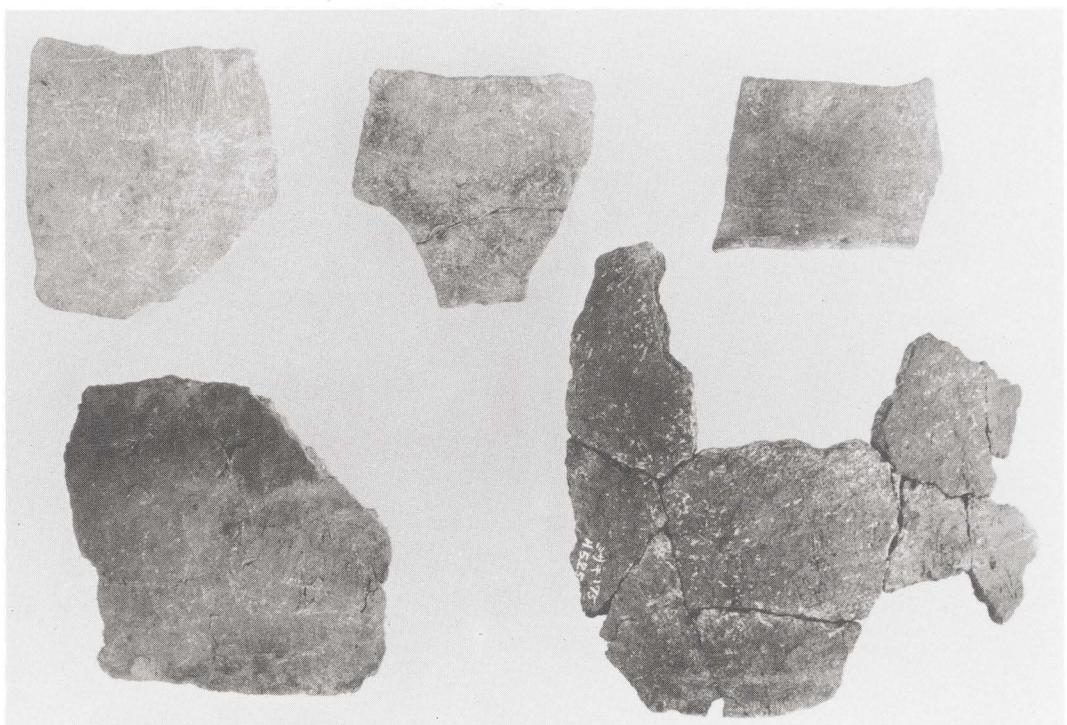
第 1 類土器



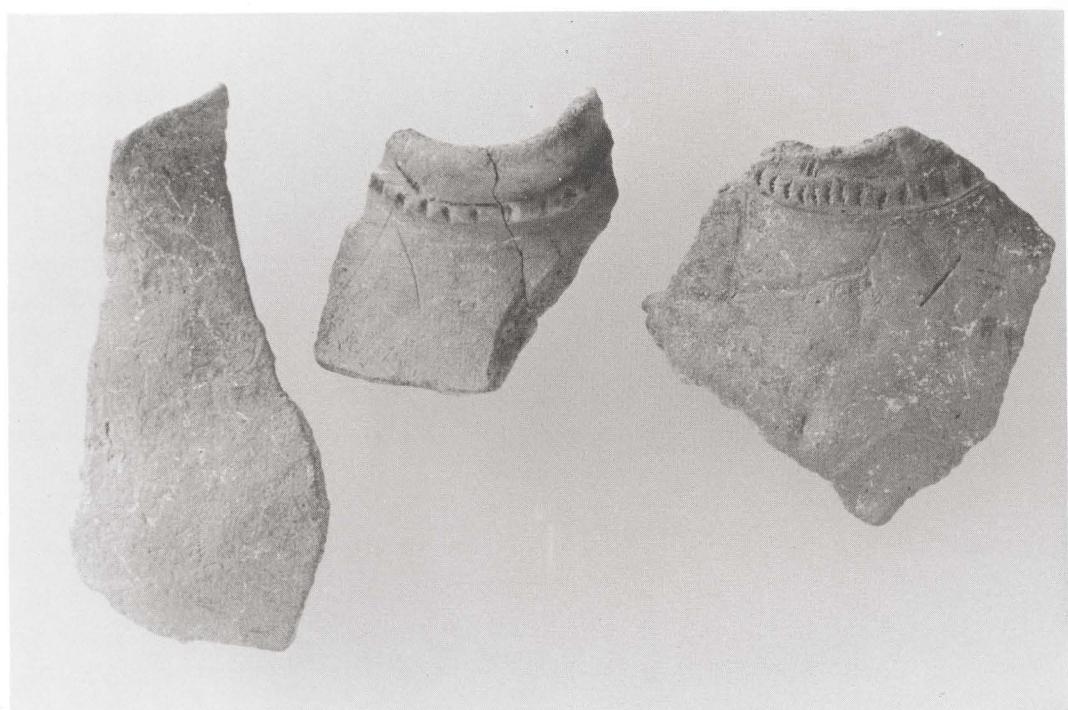
第 2 類土器



第3類土器



第4類土器



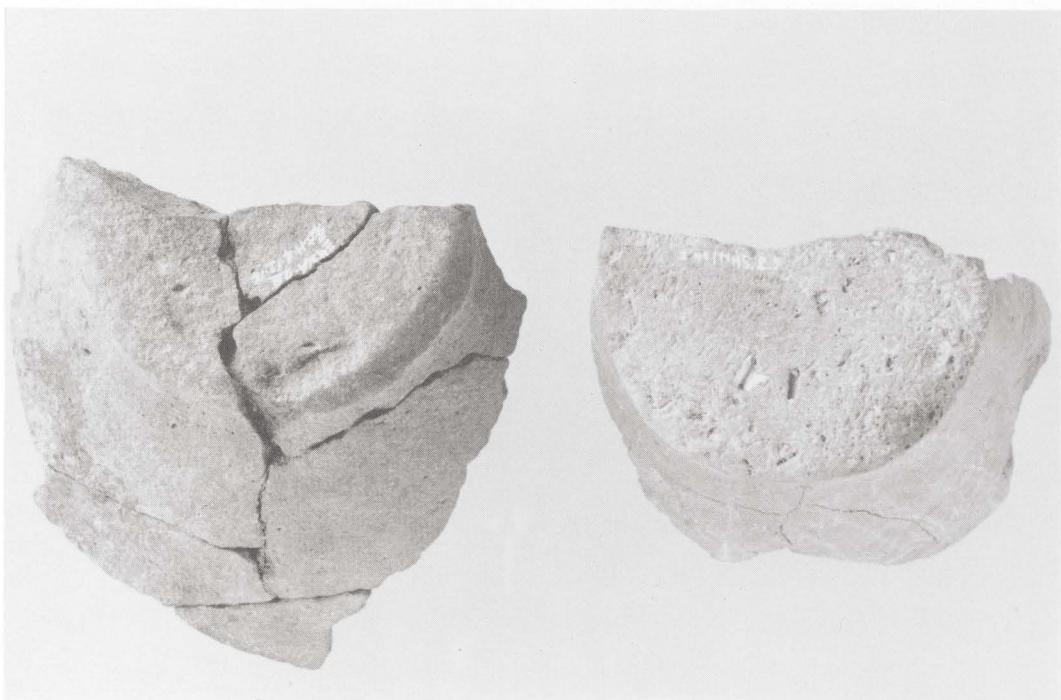
壺形土器



葉痕を有する底部



オオハマボウの葉痕



葉痕を有しない底部

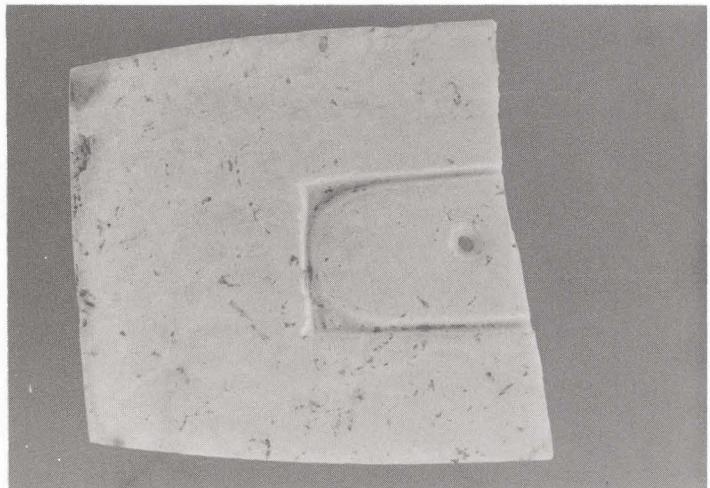


葉痕を有しない土器底部

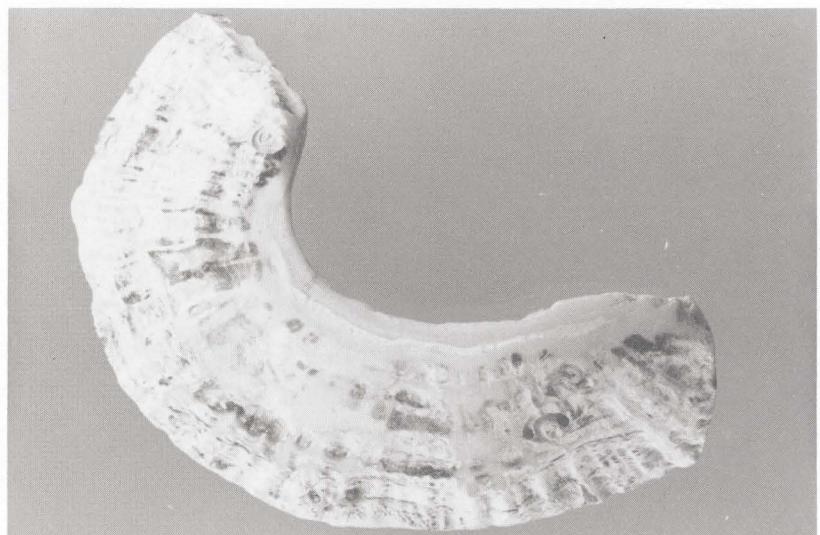


条痕を有する土器内部

貝符



貝製品

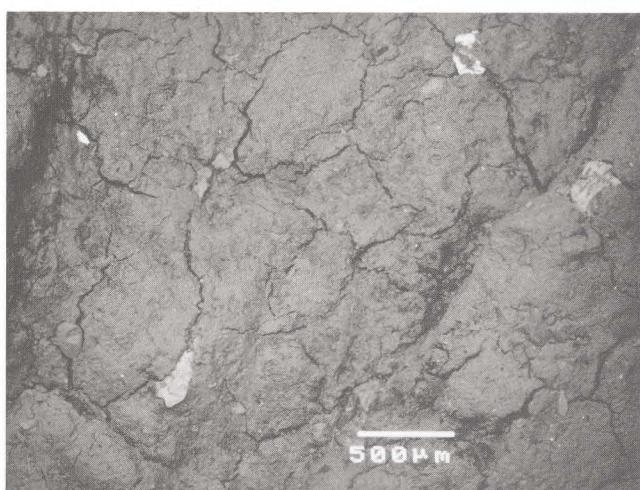
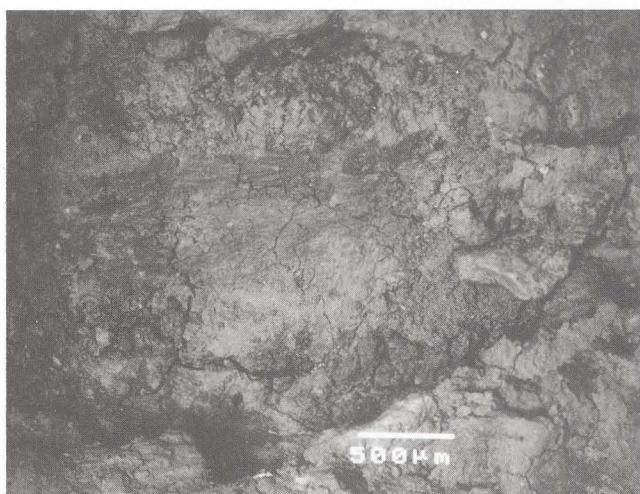
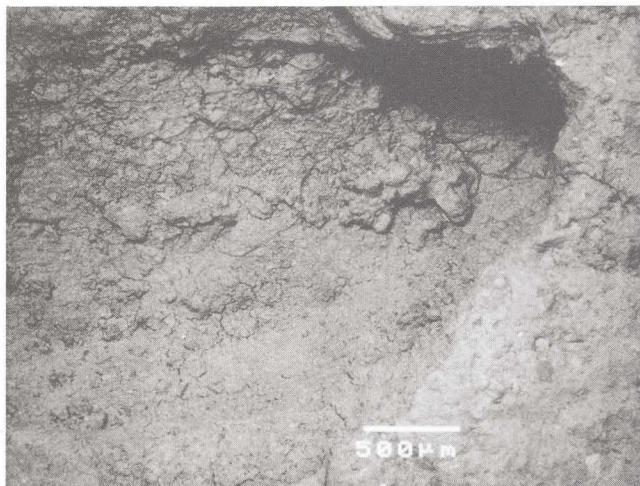


貝製品





上 2 段は貝スイ、下は石器



植物痕と思われる圧痕文

(鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵の走査型電子顕微鏡による写真、大久保浩二氏撮影)

## 用見崎遺跡

笠利町文化財報告第20号

発行日 1995年3月31日

発行所 笠利町教育委員会

鹿児島県大島郡笠利町中金久52-7

TEL 0997-63-1218

印 刷 (株)南西印刷

那覇市首里石嶺町1-127

TEL 098-884-4321